
反転・遊戯 - リバース・ゲーム - 3 (仮)

神代家家長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

反転・遊戯 - リバーズ・ゲーム - 3 (仮)

【Nコード】

N9741I

【作者名】

神代家家長

【あらすじ】

反転・遊戯 - リバーズ・ゲーム - 1 & 2 の続き。

第一章（前書き）

この3巻は一度は書き上げた作品ですが、本来なら没にしようと思っていた物です。しかし書き直した3巻の方が遅々と進まない為、（仮）として発表する事にしました。

第一章

俺は今一人の能力者に着いて行きながら下水道を黙々と歩いていった。

本部の命令で『処刑班^{エクス}』に居た俺に『狩人班^{ハンター}』への異動が命じられ、その初任務がこの下水道掃除と言う訳だ。

「あのー。一体何処まで行くんですか？」

「直ぐに分かる。黙って着いて来い」

さつきから何度も前に行く先輩能力者に行き先を尋ねているのだがまともな返答が返って来た試しが無い。

俺は溜息を吐きながら仕方なく先輩の後を黙って付いて行く事にした。

事の起こりは約2時間前。

そう。たった2時間前に俺は本部により異動命令を出され、その初任務を体験する為に下水道の中を黙々と歩く羽目になっている。

一応移動命令を受けるに当たって少しは説明があったのだが――。

「狩人班^{ハンター}？」

「そう。貴方の能力者としての力が認められて本部お抱えの実戦部隊に投入される事になったのよ。本来ならエリート能力者しか入れない特別待遇の能力者集団なんですからね」

そう俺に説明するのは本部の研究者・風切。以前におばさん扱った経緯があり、それ以来俺とは相性が悪い能力者差別のある女性だ。

「まあ、詳しい事は行って見れば分かるわ。幸い貴方の為に簡単な仕事を一つ回される事になってるから」

「あっそ」

「ちなみに貴方が配属されるのは『第四班』よ。精々死なない程度にがんばる事ね」

その説明から2時間。

今俺は紹介された第四班の班長に連れられて下水道を彷徨っている訳である。

「臭いし狭いし歩きにくいし。何処が簡単な仕事なんだよ」

「ハンターの仕事としては簡単な部類と言っただけだ。強大な敵を相手にするよりも雑魚を探して歩き回る方が難易度は低い」

「そうそう。それですよ、それ。雑魚って話ですけど一体何を狩りに着たのかそろそろ説明してくださいよ」

一応先輩なので敬語交じりに話をする先輩は『ふむ』と一瞬考えてから立ち止まって俺を振り返った。

「では少し早いが説明に入ろう」

先輩はそう前置きしてから話を切り出してきた。

「まず、我々能力者が何の為に世に出たのか知っているか？」

「さあ？単なる研究の産物じゃないんですか？」

「違う。我々はある者達と戦う為に能力に目覚め、そして戦っているのだ」

「は、はあ。それである者達って？」

「一言で言えば『人外』の者達だ。この世に存在する人に仇なす人間の仇敵。そんな者を狩る為に我々能力者が存在しているのだ」

「人外って、暴走した能力者とか？」

話に聞いたただけだが理性を無くして暴走した手のつけられなくなった能力者も居たと言う話だ。

「そんな生易しい相手ではない。相手は文字通り人外だ。人ならざる者」

「妖怪とか悪魔とか？」

「そのような者を含めて我々は『人外』と呼んでいる」
マジですか？

冗談で言った妖怪や悪魔を肯定されてしまいましたよ。

「それで、ここにもその人外を退治しにやってきた訳ですか？」

「ああ。ここに居るのは普段なら相手にしないようなランクの低い人外だ。今回はお前に我々の仕事を理解させる為に連れてきた」

「それは分かりますけど、いつになったら遭遇するんですか？」

「もう直ぐだ。もう近くまできている」

どんな根拠だ？とは思ったが黙って従う事にした。この先輩さんが探査系の能力者ではないと言い切れなかったから。

その言葉を証明すると言う訳ではないが、それから更に10分ほど歩き回った結果、前を歩いていた先輩が不意に立ち止まり緊張を身体に纏わりつかせる。

「居た。用心しろ」

言われて俺は先輩の視線に目を向ける。そこに居たのは一言で言えば『子鬼』のような存在だった。確かに人外といって良い存在なのだろうが大きさは赤ん坊くらいでフラフラ歩いている姿からは脅威を全く感じない。

「あれですか？随分弱そうですね」

「見かけで判断するな。確かにあれはランクの低い人外だが他の人外を見かけで判断して侮れば命に関わるぞ」

「それは分かりましたが、どうするんです？倒す？捕らえる？」

「無論。人外は滅するのみだ」

断言した先輩は子鬼に向けて指を指し示し――。

「滅！」

「うお！？」

先輩の指差した先に居た子鬼の足元から行き成り炎が立ち上り、子鬼を一瞬にして焼き尽くした。

「念動発火能力！？」
バイオキネシス

俺の所属している本部には何人もの能力者が存在するが、流石にそれを見るのは初めてだった。念力で発火を起こす稀有な能力という事もあるのだが扱うのが火である為に制御が難しく、制御を誤る

と自身が火達磨になる危険性を含んだ超攻撃的な能力。

「良く知っているな。俺は本部ではフレイムと呼ばれている」

「はあ。俺はリバーズです。どうも」

とりあえず、この先輩に喧嘩を売るのだけは止めておこうと心に決めた。

「なんだか面倒臭そうな所に配属されちゃったな」

俺は任務終了後、本部に報告に戻ってから自宅に帰って寛ぎながら同居人であるテンペストに愚痴を漏らしていた。

「私も貴方の相棒という立場上自動的に『狩人班』^{ハンター}に異動になったわ」

「そうは言ってもお前の方は俺のサポートだけだろ？俺は現場に直接行つてよりにもよって妖怪退治しなくちゃいけないんだぞ」

テンペストの方は俺の掛けている眼鏡と能力をリンク出来るので現場に赴かずに仕事が出来るが俺の方はそうは行かない。

「その事も色々調べてみたんだけど、貴方が心配するほどの面倒はなさそうよ」

「何か分かったのか？」

「確かに『妖怪退治』みたいな事は面倒なんだけど本部の端末にアクセスしてみた所、あのフレイムって人、相当な能力者みたい。だから仕事回ってきても貴方が直接戦うって場面は早々回ってこないと思うわ」

「それはありがたいね。楽して儲けられるなら文句を言う筋合いじゃないし」

まあ今まで『処刑班』^{エクス}で稼いだお金が既に余っている状況だが楽しんで稼げるなら文句はない。

「通称『フレイム』。私達と違って能力者を篩いに掛ける予選には出場せず本部に直接スカウトされた能力者みたいね。攻撃リンクはダブルエー
AAで貴方より少し下だけど使い勝手は悪くないわ。応用も利きやすい能力だし、上手くすれば本当に傍観しているだけで終わるかも

ね」

「益々ありがたいね」

そんな軽口を叩いていられたのはその日までだった。

確かにフレイムは有能で俺の手など煩わせない最上級の能力者だったのだが一つ大きな問題を持っていた。

「よし。次に行くぞ」

「まだやるんですか？」

俺がフレイムと組んでから約2ヶ月。

当初の予定通り俺は殆どフレイムの仕事を傍観しているだけの役割に落ち着いてくれたのだが――。

「何を情けない事を言っている！こうしている瞬間にも人外によって苦しめられている人々が居るんだぞ。我々には遊んでいる暇などない！」

「そうですね」

このフレイムの正義感というか義務感正直俺を十分ゲンナリさせた。おまけに仕事熱心でこの2ヶ月ともに休ませて貰った日など皆無に等しい。

俺の直属の上司という事もあって休む事も許されず、正直仕事の虫にされた事で家で待っているテンペストやミタマが不機嫌になっている。

何が悲しくて朝早くから妖怪退治に出かけ、一日中妖怪を相手にして、帰るのは夜中でテンペストとミタマには夜遊びして帰ってきた駄目亭主みたいな目で睨まれるような生活をしなくちゃならないのか？

そんな俺の転機は思いの外早く訪れた。

本部には幾度も元のエクスに戻すかフレイム以外の者と組めるよ

うに要請書を出したが取り合って貰えずゲンナリしながらフレイムの後について仕事に向かった先の話だ。

「滅！滅！滅！」

いつもどおり妖怪の群れを退治するのに盛大に能力を使って発火能力を連発するフレイム。毎回思うが本当に大した制御能力だ。まあ俺と違って腕輪付きの能力者なので制御も容易いのだろう。ちなみに以前聞いたが腕輪のLvは24なのだそう。本戦までに使用されていたLv5制限の腕輪に比べればかなり高出力の制御が可能な腕輪だ。

「これで終わりだ！滅！！」

最後の一体を巨大な炎で焼き尽くして今日の仕事はお終い——の筈だった。

「き、貴様ら・・・」

丸焦げになりつつもまだ生きている人外が居なければ。

「何故だ。何故我らを目の敵にして虐殺する？一体何故・・・」

「黙れ！人に仇なす人外どもめ！貴様らに踏みにじられた平和を取り戻す為に我々はお前らを許しはしない！」

「ば、馬鹿な。そんな理由で我らを殺し尽くしたのか？」

「何が馬鹿な事か！貴様らに食い殺された子供の母親の涙が理解出来るのか！？」

子供の母親？そんな話、俺は全然聞いてないぞ？

「し、知らぬぞ、そんな話。第一、我らが人を襲って生きるのであればわざわざこんな辺鄙な場所で暮らす必要が何処にある！？」

「む？」

「こんな場所で暮らすのは人と関わりを持たないようにする為だろうが！その我らが何故わざわざ人里に赴き人を襲わねばならんのだ？」

「そ、それは・・・」

返答に詰まるフレイム。

「お前、一体何の根拠で我らを滅ぼした？お前、一体今まで何の理

由で我らを滅ぼしてきた？お前、一体何の権利があつて我らを滅ぼした！？」

「だ、黙れ！我々は・・・」

『我々はただ静かに生きていただけだった。それを、それすらも我らには許されないと云うつもりか！？』

「く！我々は、我々は・・・」

「あのさ」

俺は何となく好機を感じ取って手を上げて意見を差し伸べる事にした。

「さつきから言ってる『我々は』っての止めてくれない？何もしてない俺まで連帯責任押し付けられてるみたいで気分悪いから」

「リ、リバース、お前！？」

「大体、何の為にこいつらを殺すのかなんて考えても仕方ないだろ？上から命令されて、それを実行する為だけの『狩人』の俺達には」

俺は肩を竦めながら、さも今思いついたようにフレイムを見て続いて話を進める。

「そういえばフレイムって腕輪を拾ってからそのまま『狩人班』に着たんだけ？そう言えば随分奇麗事ほざきながら人外どもを狩ってたな」

「な、何が言いたい？」

「俺はさ、『処刑班』から經由して『狩人班』に居る訳よ」

「エ、エクス？」

「知らないよな？知る訳ないよな？お綺麗な理屈を振りかざせるフレイムにはさ」

俺は嘆息しながら締め掛かる。

「エクスっていうのは文字通り処刑を実行する為の班さ。対象になるのは本部の定めたルールに反した能力者。正確に言うなら腕輪を持って逃亡しようとした馬鹿や能力を一般人に見られた無用心な奴。そう言えば本部の実験で腕輪をつけた女学生を2、30人皆殺しにした事もあったかな」

「・・・」

「それ以前に、基本的に腕輪を拾って能力者になった奴は予選と称して1対1の殺し合いを3回経て本戦というバトルロワイヤルに強制参加させられる。そこで最大5人が生き残り後々に本部に仕える訳だ。これも知らなかったか？」

「嘘だ」

フレイムはポツリと俺の言葉を否定した。

「本部は、本部は平和の為に人外と戦い続ける組織だって・・・」

「ガキじゃあるまいし。本人の言った事が全部本当だったなんてある訳ないだろ？」

「嘘だ。嘘だ。嘘だ!!」

「うげ!？」

頭を抱えてしゃがみ込んだフレイムから巨大な炎を噴出して俺はぎよっとして一目散に逃げ出した。あんなのに巻き込まれたら洒落じゃすまない。

「上手くやったわね」

「何の話だ？」

本部の救命施設で風切が言った言葉に惚けてみる。

「フレイムは精神崩壊を起こしかけているわ。多分、二度と現場復帰は見込めないでしょうね。そのお陰で今日から貴方は第四班の班長よ」

「へ」

俺はガラス越しにベッドの上で暴れ周り研究員達に取り押さえられるフレイムを見ながら気の無い返事を返した。

「まあ、フレイムは元々精神的に怪しい所があったし仕事をする理由も明確じゃなかったから上層部からは危険視されていたわ。遅かれ早かれこうなっていたでしょうけどね」

風切の話を聞いて俺はやっと俺がフレイムと組まされた理由を察していた。

要するに本部は『きつかけ』が欲しかったのだ。フレイムという男は使いにくい男であつたが、その能力は意味もなく破棄するのは惜しい。だから俺という使いやすい能力者と組ませて壊れる『きつかけ』を作つたのだ。

「本部も案外甘くないな」

「当然でしょ？これだけ大きな組織が無能揃いだつたらとつくの昔に潰れているわよ」

「なるほどね」

俺は納得したふりで頷きながらさつさとこの場から立ち去る事にした。能力者差別主義の風切などといつまでも一緒に居たいとは思わない。

「そうそう。『ゴースト』の話がまだだつたわね」

が、立ち去る為の俺の背に風切は気になる言葉を投げてきた。

「ゴースト？」

「そう。以前に本部に潜入して神剣を持ち去つたとされる侵入者の暫定的な呼び名よ。その余りにも鮮やか過ぎる手口から人間業ではないとされてそう命名されたの」

「それで？」

「そのゴーストラしき者から最近本部の端末への侵入が見受けられたわ。どうやら本部の端末から貴方の情報を目一杯引き出していったみたい。貴方の持っている『何か』が狙いみたいだから気をつけた方が良くかもね」

「ご忠告どうも」

俺は今度こそ風切に背を向けて家に帰る事にした。わかりきっていた事だが俺がミタマを所持している事はやはりバレバレらしい。

「それで班長になつたからって行き成り仕事を全部キャンセルしちゃつた訳？」

「そ」

俺が第四班の班長に任命されてから数日。

俺は自宅であるマンションのソファで横になりながらミタマに膝枕して貰って寛いでいた。

「大体、『狩人班^{ハンター}』は11班まであるって話なのに俺の第四班は働きすぎだったんだよ」

「でも行き成り仕事をしなくなったら変に思われないかな？」

「俺が班長になった直後なら別に問題ないだろ。班長になって暫くしてからさぼるのは問題だけど今だからこそサボっておく良い機会じゃないか」

俺という班長が怠け者だと宣伝する良い機会だ。

「良いのかな？」

「なんだよ？テンペストは俺が午前様で帰ってくるほうが良かったのか？」

「ま、いつか」

それでテンペストも割り切れたのかお昼の準備を始めてくれる事になった。

ちなみに以前まで俺の身の回りの世話をしていたエアーズはテンペストが俺の元へと戻ってきた時からお役御免になって本部へと戻って行った。正確にはテンペストに追い出された。

「それより主様。今日はお休みなのですよね？」

「ん？今日と言わずに暫くは休むぞ」

テンペストが昼食を作りにキッチンに行くとそれまで黙々と俺に膝を貸しながら頭を撫でてくれたミタマが期待の籠った目で俺に問い掛けてきた。

「だったら何処かに遊びに行きましょう」

「まあ、別に構わないけど」

「やった」

どうやら今までフレイムに付き合わされた時間が長すぎたのかミタマは大いに喜んだ。テンペストが便乗して着いてきたら喜びが3

削減になったけど。

第二章

「まったく。本部の連中も何を考えているんだか」

俺はいそいそと道を歩きながら愚痴ると眼鏡からは俺を宥めるような文章が送られてきたがそのくらいじゃ俺の不満は晴れてくれない。

俺は今本部の命令に従って超が着くほど田舎の道をひいひい言いながら歩いている最中だ。この辺りで最上級といえる人外が発見され、それを退治する為に派遣された第一班の班長を補佐するのが名目上の役目になるのだけ——。

「いつから俺の仕事は諜報員^{スパイ}になったんだ？」

表向きの理由は本当に表向きの理由。補佐しろと言われつつも俺に命じられたのは第一班の班長であるアクセを追跡し尾行する事なのだ。

第一班の班長『アクセ』の能力は加速^{アクセレーション}だ。撃ち出した弾丸や己の肉体を可能な限り加速させる能力を持つ一級の能力者。

そして今回の敵は歴史に名を刻み時代を変えるほどの人外。名を『白面金毛九尾』。時代の権力者の取り入り時代を動かしたとされる、かの有名な妖狐。

実力的にアクセが適任ではある。が、念の為という理由で俺を同行させる事にしたらしいが本当の理由はアクセの監視である。

上層部が何を不安に思っただけに俺に監視を命じたのかというと、アクセが九尾に誘惑されて本部を裏切るのではないかという懸念を持っている——のだと思う。俺には本部の詳しい事情を説明されなかった。

まあ本部としては普段冷徹で仕事に私情を挟まないアクスが裏切るとは思えないのだが、そういう男というのは時に女で裏切る事があるのだそうだ。これはテンペストの談。

「道はこっちで良いんだな？」

『ええ。このまま真っ直ぐよ』

「と言つても、こんな田舎道真っ直ぐしか道無いんだけだな」

このド田舎に電車で辿り付いてからずっと歩いているが記憶にある限り曲がり角があった試しが無い。ずっと一本道が延々と続いているだけの道しかない。

無論、これでは気付かずに尾行など不可能なのでアクセの姿が見えなくなつてからトボトボとついていつているのだ。いちいちテンペストに確認を取るのとは今回は彼女が俺の道案内役だからだ。

ちなみに今回が休暇を終えての初仕事だった為かミタマが俺と離れるのを大層嫌がり、結局神剣形態なら、という条件で同行を認めさせられ今も俺の腰の後ろに鞘に収まりながら幸せオーラを振りまいていた。どうやら置いていかれるよりは神剣状態でも俺に着いて来れて嬉しいらしい。

『と。そこを右に入つた林の中が目的地よ』

「ここに入る訳？」

テンペストに指示された林はどう見ても人が入れるような作りをしている林ではなく獣道すらない。

『文句言わないでさっさと行く』

「へいへい」

仕方なく俺は草木を掻き分けて指示された林の中へと入っていく。こんな事ならもう少しそれ用の装備を整えて来れば良かった。

暫くがさがさ進んでいると不意にテンペストから『警告』があった。どうやら目標との位置が近いらしい。俺は音を立てないように慎重に進みながらテンペストに目標の位置を聞きながら進む。

「お？」

不意に草木が途切れる場所があつて、俺はその途切れる一歩手前で周囲の様子をつかがう事にした。

「居たな」

『目標を確認。間違いなくアクセでしょう』

ここから先はちょっとした広場になっており、しかも綺麗な泉が中心に湧いていた。そのほとりにアクセが居て、その隣には――。

「あれが件の九尾か？」

『恐らくは』

長く透けるような白い髪にやはり透けるような白い肌。そして白い着物を着た美女がアクセの隣に立って楽しそうに談笑していた。

「確定かな、こりゃ？」

アクセがここに来るのは公式だけでも既に3度目。話によれば私的にも何度か着ているらしいので本部の懸念も当然の物だったろう。しかし状況は確認してみた物の、この位置ではいささか角度が悪い。俺は自分の有利になる位置まで移動しようとして――。

「誰だ!？」

足音も立てていないのに行き成り見つかってしまっていた。流石は一級能力者。

「あゝ。とりあえず通りすがりの者って言ったら信じてくれる？」

「誰だ、貴様？」

「まあ正直に言うとな俺は『狩人班』^{ハンター} 第四班の者さ」

「第四班？ フレイムの後続者か？」

良くご存知で。しかしフレイムの名が出たという事は俺の事は余り知らないのかもしれない。俺の知名度としてはソコソコだがまだ新人の部類だから。

「それで第四班の継続者がここに一体何の用だ？」

「仕事さ。あんたを補佐して標的を抹殺するように指示されている」

「む」

俺の睨むような視線にアクセは少しだけ視線を逸らした。

「こ、ここは俺一人で十分だ。お前は帰って本部にそう伝えろ」

聞いていた冷静で冷徹なアクセとは段違いの戸惑ったような声。まあ状況証拠などに頼らなくても既に決定と俺の頭の中では処理されている。

「それはつまり、あんた一人でも件の九尾を抹殺するのに十分だと

言う意味か？」

「そ、そんな事がお前に何の関係がある！？」

「あるに決まっているだろうが。子供の使いじゃないんだ。あんたに言われたからといって『はい、そうですか』と引き返せると思っているのか？」

「・・・」

「答えて貰おう。あんたがそうやって九尾の隣で親しそうにしているのは作戦で九尾を撃つ為の演技なのか？」

「え？」

俺の言葉に反応したのは当然当の九尾の方だ。今までアクセの隣に居た彼女はアクセから一步距離をとって警戒心からか両手で身体を抱くようにしている。

「ち、違うんだ！俺は・・・」

「俺は？」

焦るアクセの言葉を引き継いだのは俺。当然アクセは言葉に詰まる。だが怯える九尾の視線を見て胆が決まったのだろう。アクセは懷から取り出した拳銃を『俺に』向けて構えてきた。

「それが答えて事か？」

「何とでも言え」

開き直ったのか迷いの無い視線で俺を睨みつけるアクセ。予想はしていたがやはりこうなったか。

仕方が無いので俺も手の中に握り締めていた物を開いてアクセに公開する事にした。俺の手に握られていたのは一般硬化である10円玉だ。

「狙撃系の能力者か」

「このコインは絶対に外れない。あんたや九尾がどんな能力を持っているよりも絶対にだ」

「相打ちを狙うつもりか？」

「俺もそこまで馬鹿じゃない。俺が狙うのは九尾の方さ」

「・・・」

「あんたが銃を俺に向かって撃てば俺は死ぬかもしれない。だが同時に俺の手からもコインが飛ぶ」

狙い通りアクセは撃ってこない。正直嘘は言っていないがハッタリだらけで内心冷や汗を流しまくっていた。

なんと言っても俺が10円玉を使用する能力技『リバースエア反転滑走』は確かに強力だが西にしか飛ばないと言う弱点がある。そして今俺から見てアクセと九尾は北に居るのだ。今ここで『リバースエア反転滑走』を使っても左に飛んでいって終わりという情けない結末になる。

だが本当に嘘だけは言っていない。

『このコインは絶対に外れない』と言ったのは今コインを絶対手放す気は無いから。

射出されない「当たらない」外れない。

どんなに命中率の悪い銃だろうと撃たなければ外れないのである。「何が目的だ？このまま膠着状態を永遠に続ける気ではないのだから？」

そんな俺の事情を知らずにアクセは交渉に乗ってきた。

「俺がこの場に居るという事で既に予想は付いているのだろう？本部はあんたが裏切ったのではないかと疑念を抱いているぞ」

「・・・」

「あんた自身にも分かっていると思うが、このまま逃げれば何処に行こうと本部はあんたを裏切り者として抹殺する為に追いかけてくる」

ここからが俺の腕の見せ所という奴だ。

「今ここに俺が居るという事は表向きは兎も角、本部はあんたの裏切りを確定していたという事だ。だが事情はどうあれ本部はあんたの能力を買っている。だから出来るならあんたを裏切り者として始末するよりは軽い刑罰くらいで済ませて戻って欲しいのさ」

「何が言いたい？」

「要するに本部が納得する形で条件を整えてやれば良いのさ。本来ならあんたが九尾を殺して本部に帰るとというのが本部の連中の理想

だろうが、あんたは九尾を殺したくない。殺させたくもないのだろう？」

「当然だ」

その言葉に九尾がホッと息を吐くのが分かった。

「だったら妥協案を出すしかない。あんたは本部へと帰り、九尾は死んだ事にして何処か安全な所へ場所を移してひっそり暮らす。これが俺に提示出来る最大限に譲歩出来る条件だ」

「・・・」

「言っておくがあんたは本部にがつちりマークされている。あんたが九尾を保護するという意見なら却下だ。見つかって九尾を即座に殺されて良いのなら話は別だがな」

勿論アクセは迷った。俺の提示した条件なら確かに九尾の安全は保障されるかもしれないが、それはつまり九尾とは二度と会えない事を意味している。

惚れた女が生きているのに二度と会えない。男なら当然葛藤してしかる場面だろう。

「分かった。その条件を飲もう」

「アクセ！？」

葛藤を終えたアクセの返答に九尾から彼の名前を呼ぶ声が漏れる。僅かながらに憤慨を含んだ声。

「すまない。だが君が死ぬよりは良い。君が生きていてくれれば」

「アクセ」

悲しそうな瞳でアクセを見る九尾には悪いが俺はこんな三文芝居を見る為に頭を捻った訳じゃない。

「さて。そうと決まればあんたはさっさと本部に帰還しろ。その女には俺が都合の良さそうな場所を提供してやる」

「信用して良いんだな？」

「神に誓って、と言っても良いんだが俺は神を信じてないんでね。とりあえず俺の名『リバーズ』の名と俺の誇りに誓って約束しよう。彼女の安全は保証する」

「お前がリバーズだったのか。良いだろう、今回だけお前を信用してやる」

どうやら俺の名を知っていたようだ。アクセは自嘲するように去って行き、後に残されたのは俺と九尾の女。

「行ったか？」

『ええ。貴方の名前だけで性格なんて知らなかったのでしょうね。素直に道に戻っていったみたいよ』

なんだかちよつと含みのあるテンペストの反応に凶星を突かれた気分になりながら俺は九尾に向き直る。

「さて。とりあえず林を抜けないと話にならない。そこまでの道案内を頼めるか？」

「ええ」

暗い顔で頷いた彼女は俺を先導する為に先行して行く。俺は彼女の後を着いて行きながら都合の良い場所まで来た所で背中をドンと押して前のめりに彼女を引きずり倒した。

「な、何を！？」

「さて。何をするつもりだと思っかね？」

「騙したのね！？」

「人聞きの悪い」

まあ嘘は言っていないが確かに俺は『騙した』のだから反論は控えておく事にする。

「よくも！」

思ったより俊敏に立ち上がった九尾は指から拳大の炎を生み出す。狐火って奴か？だが炎ならこの間まで先輩だったフレイムの方が何倍も凄かった。俺は九尾の打ち出してきた炎を服に仕込んでいた鎖の鞭『リバーズエッジ』で弾き飛ばす！

「え？」

それが予想外だったのかあっさり九尾は呆気に取られ、俺に組み敷かれて身動きを封じられた。

「く！は、離しなさい！」

九尾の言葉を見ても無視して俺は腰の後ろからミタマを鞘から引き抜く。
「し、神剣!？」

それを見て九尾が驚愕する。どうやらミタマを知っていたようだがそんな事は無視して俺はミタマの柄で九尾を殴りつけ——あっさり九尾は気を失ってその場に倒れた。

「思ったより手応えなかったな」

『多分歴代の九尾本人ではなく生まれ変わって力を継承しただけの新九尾なのよ』

そのテンペストの意見を証明するように気絶してしまった九尾は小さな子狐の姿へと変わっていた。九尾なだけあって尻尾は九本あったが。

「これなら思ったより運ぶのに手間取らずに済みそうだな」

『帰りにペット用の籠でも買っ行って行けば?』

「そうするよ」

更にテンペストの意見を採用する形で俺は九尾を連れていく事にした。

「ただいま」

「おかえりなさい」

自宅であるマンションに帰ると思ったより普通の態度で応対してくれるテンペストが居てホッとした。

更にミタマを人間形態に化身させてから俺は途中で買ってきた旅行用犬小屋を床に置いて閉めていた扉を開く。

「あれ?」

閉じ込めていたのだから当然飛び出してくるかと思ったのだが出てこない。俺は仕方なく手をついて込んで九尾を引きずり出そうと——

「あ、リバー。それはちよつと・・・」

「え？」

その俺にテンペストが忠告した時には遅かった。

「いででで！！！」

俺の手に激痛が走り慌てて引いた俺の手には盛大に俺の手に噛み付く九尾が居た。

「痛いっつゝの！」

首根っこ捕まえて引き離すも尚も警戒態勢バリバリで俺を睨みつけてくるチビ狐。

「まあ誘拐同然に連れて来た訳だから警戒するのは分かるけど普通行き成り噛み付くか？」

「相当頭に来ていたんでしょ。きつと」

「ま、どうでも良いけどな。その辺りは」

薬箱を持って来たテンペストに噛み付かれた箇所を治療して貰いながら俺は既に緊張を解いていつもどおりだった。

その俺に対して暫く警戒して唸っていた九尾だが既に相手にしていない俺を見て馬鹿らしくなったのか人間形態に化身して不機嫌ながら問い掛けてきた。

「ここは何処？」

「俺の家」

「？」

簡潔な俺の答えに更に当惑する九尾。

「研究所とかではないの？どうして私をこんな所に連れてきたの？」

「んゝ。何となく」

俺の答えに不満だったのか今度は俺ではなくテンペストに視線を向けた。

「リバー。スって大事そうな物を人から横取りするのが好きな人なのよ。だから貴女はアクセや本部の研究者達から『横取り』されてここに来たって事。お分かり？」

「私をどうする気？」

「別にどうもしないんじゃない？リバースって大事な物を横取りするのが大好きだけど手に入れた後は放任主義なのよ」

「・・・」

「ちなみにリバースがアクセや貴女と約束した事に嘘はないわ。少なくともここに居れば貴女の安全は保障されるしね」

「何処が？」

「本部が貴女の退治をアクセに要請したのはアクセの裏切りの可能性を露見する為よ。だから貴女の生死に関しては本部は割と無関心で居てくれる筈。リバースの傍なら確実に本部は干渉してこないでしょうし」

「何故？」

「リバースが本部を裏切る可能性が最も低い能力者だからよ」
「・・・」

テンペストにある程度話を聞き終えた九尾はその場にペタンと尻餅を着き『はあ』と溜息を吐いてから――。

「お腹が空いたわ」

食事を要求してきた。

「それで私は一体いつまでここに居れば良いの？」

食事が終わった後九尾――前世から受け継いだ名で玉藻というのだそうだ――が問い掛けてきた。

「好きなだけ居れば？」

「私の活動範囲は？私はどの部屋で過ごせば良いの？」

「別に適当に歩き回って構わないぞ。新しい寝床見つけたらそっちに行っても構わないし」

「私の権限は？」

「とりあえず衣食住は保証するよ。他に必要なら小遣いくらいはあげるし」

「・・・」

話をする度に何故か玉藻はガツクリ肩を落として嘆息する。

「もう一度聞くけど、どうして私をここに連れてきたの？」
「ん〜。何となく？」

最後に大きな溜息を吐いて諦めたみたいだった。

白面金毛九尾・玉藻

騙されて連れてこられた住居にしては意外にも住み心地は悪くなかった。

最初の話どおり私は特に束縛される事も無いし、衣食住は提供され、更に街中だというのに自由に歩き回っても文句を言われない。

考えてみたら住み心地が良いどころか今までの生活より格段に贅沢な暮らしをさせてもらっているかもしれない。

「お〜い、玉藻。散歩行くけどお前も来るか？」

「あ、うん」

その日も当然のように外に連れ出されて散歩に行く事になった。途中でアイスなんかも奢って貰って人間形態だから良かったものの狐形態だったら尻尾を振っていたかもしれない。

「良い天気だな〜」

ぼんやり日向ぼっこをする彼——リバーはいつもどおり緊張感がない。アイスをぱりぱり齧りながら至極リラックスしている風である。

「ねえ」

だからかもしれない。そんな事を聞いてみたいと思ったのは。

「あの時、もしアクセが引き金を引いていたら貴方はどうしていた？」

ずっと気になっていた事。あの時アクセと敵対していた彼は本気で私を殺せたのだろうか？

「ああ。あれ全部ハツタリだわ」

「え？」

「確かに俺は10円玉を使った攻撃法はあるけど、それって西にし

か飛ばないんだよ。アクセの前に顔を出す前にお前らの東に移動しようと思ってたんだけど、あっさり見つかってハツタリで時間を稼いでいた訳。内心撃たれたらどうしようって冷や汗ダラダラ流してたんだわ、これが」

「呆れた。それじゃあの時アクセが引き金を躊躇なく引いていたら・

・・」

「全部終わってただろうな」

「はあ」

私は再度呆れて溜息を吐く。

「でも実際の話アクセが貴方を殺して私を連れて逃げて直ぐに追っ手が掛かったんでしょ？」

「それは間違いないだろうな。アクセって『^{ハンター}狩人班』の第一班、つまり『^{ハンター}狩人班』の中で一番強い班の班長だから注目度も高いし、面子を気にする本部が裏切りを許す筈もなかったし」

「でも一番強かったんでしょ？」

「あくまで『^{ハンター}狩人班』の中では、ね。本部には『^{エクス}処刑班』って対能力者用の班があって能力者を殺す事を専門にしている奴がゴロゴロいるんだ。俺も以前そこに居たから分かるけど相性的に言ってアクセに勝ち目は無かっただろうな」

「ふん」

なんだか色々複雑な事情があるみたいだけど私もアクセも死なずに済んだのだからとりあえず良かったのかもしれない。

「そういえばアクセって今どうしているの？」

「さあ？とりあえず裏切りそうでしたって報告はしておいたから今頃懲罰室にでも居るんじゃないか？」

「え？」

「それと。お前は俺が退治した事になってるから」

「ど、どういう事？」

私の心に芽生えた不信。その不信が――。

「建前だよ、建前。本部としては一応裏切りそうになったアクセに

何か形だけでも刑罰を与えないと示しがつかないし、そのアクセを従わせる為にも誰かがお前を退治した事にしとかないと都合が悪い
だろ？アクセが退治されたと報告されて安心出来る奴って今の所俺
だけだから本部としてはそう発表するしかないんだわ」

「はう」

殆ど一瞬で消え失せた。

「それじゃアクセは大した刑罰は受けていないし、私は退治された
事になっているから自由に動けるのね？」

「建前はな。本部の連中もそれほど間抜けじゃないから俺が玉藻を
連れ帰った事くらい既に察知しているだろうし」

「え？」

「余りおおっぱらに動かなきゃ問題ないって。テンペストも言っ
ただけど本部は俺がお前を連れ帰った事に関しても黙認してくれてる
から」

「何で？」

「俺が分かりやすい理由で本部に着いているからさ。本部としては
アクセみたいな奴より俺みたいな奴の方が扱いやすいんだろ」

「ふん」

なんだかよく分からないけれど納得しておく事にした。

「でもさ、それって私が貴方の監視下に居るって事だよね？その私
をこんなにおおっぱらに連れ出しちゃって良い訳？」

「どこか行きたい所でもあるのか？」

「え？」

言われて初めて考える。私は何処に行きたいと思っていたのか。
そして何処にいけると思っていたのか。

考えてみれば意外に選択肢は多い。

今なら多分アクセの元に転がり込む事も出来るだろうし、元のあ
の林に戻る事も出来るだろうし、他にも何処か違う場所へと行く事
も出来るだろう。

でもアクセの元へ行ったら彼を監視する人達に見つかって黙認ど

ころじゃないだろうし、林には行けるだろうけど元の野良狐生活に後戻り。他の場所へ行くにしても今以上の生活の保障があるとは思えない。

そう気付いた時思い知った。

『この人、ずるい人だ』って。

今考えたとおり私は何処へでも行けるだろう。けど今以上の生活環境なんてある訳が無い。例え今以上に裕福に暮らす方法があっても安全がついてこない。選択肢があるのに選べる物が一つしかない。否、選びたいと思える選択肢が一つしかないのだ。だから『ずるい』と思った。

選択肢が最初から一つしかないなら諦める事が出来る。仕方ないのだと自分を納得させる事も出来ただろう。

でも他にも選択肢がある以上私は自分の意思で選択しなくてはならない。自分の意思で彼の元に居る事を選ばなくてはならない。

自分で選択した以上それは自分の責任だ。どんな事情があろうとそれを選んだのは私自身の意思で選ばなかったのも私の意志なのだから。

「そうやって無関心なふりしておいて酷い人」

「ん？」

「酷いと思うのに私は結局選べる選択肢を変えられない。自由を失ってでも今の生活にすがり付いてしまう」

「自由ってそんなに良い物か？」

「・・・」

その通りなのだ。自由は確かに魅力的だが、やる事成す事全て自分で決めなくてはならない。そんな自由に私は疲れていたのかもしれない。

リバースの元に行けば自由が狭まる。でも完全に束縛される訳ではない。居心地の良い束縛とある程度の自由を保障される。

短期間とは言えそれを味わった私はもう元の自由には戻れそうも無かった。

中途半端な自由。それは何と魅力的な響きなのだろう。

「ん？」

私がそんな哲学的な事を考えていると隣に座っていたリバー스가何かに反応して渋い声を上げていた。

「どうしたの？」

どうやら眼鏡から何か連絡が入ったみたいなのだが仕事でも入ったのだろうか？それはちよつと残念な気がしたのだが――。

「アクセが近付いてくる」

「え？」

その答えは私を凍りつかせた。今リバーズの元でぬくぬくしている自分をアクセに見られたくないと思ったからだ。

「ど、どうしよう？」

「隠れるか？」

「ど、何処に？」

「何処つて。あ、もう直ぐそこまで来てる」

「ちよ！？」

私は慌てた。慌てていたので身近な所――狐に戻ってリバーズの懷へと急いで潜り込んでいた。

「ぬ、温い」

『我慢して』という意味を込めてリバーズのお腹を引掻いたら黙り込んだ。痛かったのかもしれない。

その数分後、待ち望んだアクセの声が――。

「居たな」

想像以上に冷たい声で響き渡った。

「随分正確に俺の位置を確認してきたな。探查系能力者にでも助力を頼んだのか？」

「玉藻は何処だ？」

対するリバーズのいつもどおりの声を無視して更にアクセの冷たい声を通る。

「俺に何と答えて欲しいんだ？」

「答える！」

チャッと音がしてアクセが銃を構えたのが分かった。それと同時にリバースが私の隠れている付近を両手で包み込んだのも。庇ってくれているのだ、私を。

「本部の連中か、それとも風切あたりから何かを聞いてきたのだろう？」

「・・・」

「それが真実だったとしてお前に何が出来るんだ？現在進行形で監視されているお前に」

リバースの行動はある程度黙認される。恐らくその黙認行為がリバースを縛り付ける鎖になるからだ。だがアクセの行動は黙認されない。彼はある意味優秀すぎて本部にとって有益過ぎるからだ。リバースのように余計な要素があった方が働く人と違ってアクセは余計な要素があればあるほど重荷にしてしまう人だから。

「この場で殺しても良いんだぞ」

「出来るのか？お前に」

出来る訳が無い。リバースの死はイコール私の死だ。アクセはそれが分からないほど馬鹿ではない。

「玉藻は直ぐに取り戻す。直ぐにな」

「・・・」

最後にそう言ってアクセは去って行った。

「なんだか私が知っているアクセとは別人みたいな声だった」

「そりゃそうだろう。どんな奴だって好きな奴の前では猫を被るもんさ」

「そう。そうなんだ」

それは分かるけど何だか寂しい。私に優しくったアクセは演技だったのだろうか？

「ねえ。私どうすれば良かったのかな？」

多分、相手の答えが分かっている問い。それでも問いかけた私の問いに――。

「お前は俺の傍に居れば良いよ」

「え？」

予想外の答えが返って来た。きつとりバースは『好きにすれば良いよ』と言うと思っていた私は期待外れというより――。

「ずるい」

思わずそう呟いていた。

だってずるい。このタイミングでそんな事を言うなんてずるいとか言いようがない。このタイミングでそんな事を言われたら――好きになっちゃうかもしれないじゃない。

「ずるい。ずるいよ」

「よく言われる」

そう答えるリバースに私は引き寄せられるように口付けていた。

そうしてリバースとキスをしながらまた『ずるい』と思った。

多分今アケセは私を遠目に見ているだろう。それが分かったのにキスを中断しようという気になれない。もっと、もっとキスしたいと思ってしまう。

本当にずるい人だ。

「言っておきますけどリバースの言葉を全部真に受けない方が良いでしょう」

長いキスをしてばわわして帰ってきた私にテンペストがそう言った。

「どつという意味？」

「例えば林で銃を突きつけられたリバースが冷や汗を流していたという話です。リバースには『リバース コア反転結界』という切り札があるのでアケセがどれほどの速度で弾丸を撃ち込んで来たとしてもそれを正確に跳ね返せた筈なのです」

「それじゃ嘔吐いてたの？」

私の少々浮かれ気味の頭が少しだけきゅっと引き締まる。

「いえ。それがリバースのリバースらしいところというか。確かにリバースはアクセに銃を向けられて冷や冷やしていたのだと思います。でも、それは自分が殺されるかもしれないと思う事に対してではなくアクセを殺してしまうかもしれないという事に関してです」

「？」

私はちよつと理解が走らない。それはリバースにとって何か問題があるのだろうか？

「今は兎も角、あの時アクセをリバースに殺されていたら貴方リバースに素直に付いてきましたか？」

「あ」

「だから冷や冷やしていたんでしょう。折角横取りの計画を立てていたのに全部水の泡になってしまふ訳ですから」

「そ、それって・・・」

「ええ。基本的にリバースは嘘を吐きません。けど、それが真実であるかどうかは後になってじっくり吟味してみなくては分からないのですよ」

「は、はあ」

私は感心すれば良いのか呆れば良いのか。

「それと。アクセに表裏があると言っていましたか、それは人間なら当然の使い分けという物です。無論リバースにだって二面性があるのですから」

「それは何となく分かる気がする」

「どうか分かりやすい。」

リバースの表の顔はボンヤリしている時で裏の顔は恐ろしくずるい人なのだ。そしてそれを隠さない。

「ああ。だからなんだ」

だからリバースの傍は居心地が良いんだ。だってリバースの顔を伺う必要がないんだもの。

「言っておきますがリバースは貴方が考えているより数段ずるい人

ですからね」

「でしょっね」

まあ、でも暫くはいいに居ようと思った。

第三章

「まったく。どうして毎回毎回面倒な仕事ばかりアタシの所に舞い込んで来るんだか」

アタシは——女性に反転したりバースは十数人の能力者達に囲まれながら大いに愚痴を零していた。

囲まれているといっても彼らは敵ではない。正確に言うと今回の任務の共同作業者とでも言えば良い連中である。当然のように全員がアタシと違い腕輪を着けた能力者であるが腕は悪くない筈だ。

彼らは物量戦に長じた第三班の『狩人班』^{ハンター}達なのである。

事の起こりは玉藻を手に入れてノンビリ休暇を（勝手に）楽しんでいた時に唐突に連絡が入った。

玉藻に続く大物の人外が発見された為にアタシに協力を要請する内容だったらしい。らしいというのは連絡を受けたのがテンペストでアタシは又聞きだったからだ。

そして自宅から電車で2日も掛かる港町でアタシは第三班と共同で人外の排除の為に準備をしている最中なのだった。

「リバース。突入の時間です」

「おし！」

アタシは夜の港町を進む。

今回の敵は吸血鬼。吸血鬼相手に何故夜に戦いを挑むのかという理由は二つ。

一つは純粹に昼間は何処を拠点にしているか不明の為、搜索不可能だったから。

一つは昼間追い込んでしまうと日の光を浴びて灰になってしまう可能性があり、連れ帰って研究材料に出来なくなる為らしい。

吸血姫

「イニアス様。お食事の準備が出来ましたよ」

「いいらない」

丹精こめて作った食事をあつさり拒否されて私——吸血鬼・セシリア「ディール」アルトレリアは落胆を隠せなかった。

「そんな事を言わずに少しでもいいからお召し上がりください」
「いいらない」

私の説得に対してもイニアス様の返答は変わらない。まあ確かに丹精こめて作ったといえ所詮は人間の食事だ。吸血鬼である私達にとつては大して美味しい物ではない。

「僕は血が飲みたい」

「我慢してください。今の情勢下、下手に動けばあつという間に身動きが取れなくなってしまうのですから」

「人間なんて蹴散らしてしまえば良いじゃないか」

「はあ」

イニアス様は私と違って正当な血を受け継ぐ由緒ある血統を持つ吸血鬼なのだが、まだまだ生きた年月が不足しているのか思考が短絡的で困る。

「良いですか？何度も言いますが人間を侮つてはいけません。人間の個人的な能力は兎も角、群れとしての力は最上級なのですから。それに最近では私達のような者を狩る為の特殊な部隊が設立されたという噂も聞きます。ご自愛くださいイニアス様」

「そんな話は聞き飽きた。僕はただ外に自由に遊びに出て浴びるほど血を飲みたいと言っているだけだ」

それが出来ないからこうして隠れ住んでいると言つのに。

「大体この十数年、全く血を飲んでいないから僕は全く成長出来ない。本来ならとくに成人している歳なのに。見ろ、この身体を！」

イニアス様は私よりかなり年下であるが確かに成人と言っても良い年齢はとくに過ぎている。なのに年恰好が10歳前後にしか見えないのはイニアス様ご自身の言葉通り血を吸っていないからだ。

「イニアス様の安全を考えればこそです」

「人間相手に何を臆病な！僕達の力を持つてすれば人間の100人や200人、あつという間に隷属出来るだろうが！」

「人間の中には我々と同じく特殊な力に目覚めた能力者が居るので。特に『神剣使い』と呼ばれる一族は強力で我々の祖国を滅ぼしたのは彼らだと言われているのです。そんな連中に目を付けられてイニアス様に万が一の事があつたら我々の未来はどうするおつもりですか？」

「・・・」

ちよつと言い過ぎたかもしれない。俯き加減で涙ぐんでいるイニアス様を慰めようとした所に――パリーン！と窓ガラスを割って何かが投げ込まれた！

「！」

その『何か』を察知した私は即座にイニアス様を押し倒すように床に引きずり倒し自分の身体を盾にするようにして庇う。直後、予想した爆発ではなく眩しい閃光と衝撃音が響き渡った。

どうやら投げ込まれたのは手榴弾ではなく発光式のスタングレネードだったようだ。

「ご無事ですか、イニアス様？」

「い、一体何が・・・」

「敵襲です。相手が何者かは分かりませんが、この場は撤退致しましょう」

「撤退？この僕にこんな仕打ちをした連中相手に逃げるというのか！？」

「無礼を承知で言いますが実戦経験のないイニアス様を連れていては戦えません。この場は撤退がベストです」

「くー！」

噛み千切るほど強く唇を噛みながらも自分が足手纏いだと言われた事は分かったのだろう。素直に起き上がって私に手を引かれながらも付いて来てくれた。

「や！」

「ぐぼー！」

襲撃者である人間の腹に掌底を叩き込むと人間の身体がくの字に折れ曲がり、そのまま痙攣して倒れこむ。今の一撃で内臓の七割近くは使いものにならなくなった筈なので助かりはしないだろうが丁寧にトドメを刺している余裕はない。

「こつちです！」

私はイニアス様の手を引いたまま更に5人目の襲撃者を撃退して尚も逃走を緩めない。

正直、久々の戦闘と殺戮の感触に気分が高揚しているが、それを味わっている暇はない。私もイニアス様と同様にもう随分長い間血を吸っていない為、正直な話いつまで今の戦闘力を維持出来るか分からないのだ。

力を維持出来ている間に逃げ切れなければ終わりだ。

そんな事を逃げながらツラツラ考えていた私の前に次の襲撃者が現れる。

「やあ！」

先程までと同じように掌底を繰り出して最短で終わらせようとする私の攻撃は狙い通り襲撃者の腹に決まり――。

「痛っ！」

繰り出した私の右手に衝撃が跳ね返ってきて思わず多々良を踏む。まるで分厚い鉄板を殴ったかのような感触だった。

「ふん。内臓を一撃で破壊する驚異的な攻撃だと聞いていたから絶対防御を使ったと言うのに大した事なかったみたいだね」
「くー！」

目の前に襲撃者の言葉に私は思わず身構える。

改めてみれば襲撃者の正体は女性。それも燃えるような長く赤い髪をなびかせる恐ろしく美しい女性だった。

その女性が今までの襲撃者とは格が違うという事は一目で分かった。何故なら彼女が腰の後ろの差しているのは――。

「神剣使い」

紛れもなく神剣。人間の研究で生み出された似非能力者の襲撃かと思っただがとんだ大物が隠れていたと言う訳だ。

「イニアス様、お逃げください。この者は簡単には通してくれそうもありません」

「で、でも・・・」

「早く!!」

迷っていたイニアス様は私の一喝にビクンと驚いて一目散に駆け出していく。そう。それで良い。イニアス様さえ無事なら私達『闇の眷属』は復興可能なのだから。

「あの坊や、王族か何かかい？」

腰の後ろの神剣ではなく服の中に仕込まれていた鎖を引き抜きながら尋ねてくる神剣使い。

「答える義理はない！」

その彼女の問を無視して攻撃を仕掛ける私。先程の掌底は通じなかったが爪ならどうか？

鋼鉄さえ切断する私の爪は、しかし彼女に届く前に彼女の持っていた鎖が私の腕に蛇のように巻き付いてきて――。

「あぐ！」

瞬時に私の腕の皮膚が裂ける。

「捻じ切れるかと思っただけど案外丈夫だね」

「く！」

損傷した右腕を庇いながら私は距離を取る為後ろに下がる。神剣なら兎も角、銃弾や刃物では傷も受けない私の身体に傷をつけられた事が自然とそういう動作を取らせていた。

戦いは膠着した。

膠着と言っても実際の戦闘時間は10分に満たないものだが膠着は膠着である。彼女の攻撃は私の身体に細かい裂傷を無数に作り、私の攻撃で彼女の手に行っていた鎖は半場以上千切れ飛んで彼女自身も幾つか裂傷を帯びているがいまだに両者健在。

「しぶといと言うか何と言うか。面倒な仕事だと思っていたけど悪くない気がしてきたよ、アタシは」
「？」

意味不明の彼女の言葉に首を傾げるが彼女の言葉に対応するように彼女の掛けていた眼鏡が僅かに発光したように見えた。

そして彼女はニツと笑うと背後の背を預けていた壁を滑るように――。

「え？」

彼女の身体が上に上昇し、5メートル以上はあると思われる屋根の上に昇って姿を消した。

「逃げた？」

どんな手品を使ったのか知らないが戦闘中に姿をくらませたという事は逃げたのだろう。私は少しだけ安堵の息を吐いて――。

「――！！！」

自分の愚かさを呪いたくなった。

何故膠着していた戦闘から彼女が退いたのか？その意味を思い当たった所で私は彼女が消えた方向へと駆け出していた。

彼女が私を手強いと認識し、そして尚戦いを諦めていないのであればやる事は一つしか思い当たらない。それと連動して彼女の発光した眼鏡が何らかの受信機だったと推測すれば彼女の目的は自ずと知れた。

「遅かったね」

私が彼女の元へ辿り着いた時、全ては手遅れになっていた。

「とっとと逃げれば良い物を。物陰から様子なんて覗いててくれるからアタシとしては大助かりだったけどね」

地面にうつ伏せに倒され首に半分以上千切られた鎖を巻きつけられたイニアス様の姿がそこにあった。

それは予想されて然るべき事態だった。普段の言動とは裏腹にイニアス様はまだまだ子供だ。だから一人で逃げるのが怖くて私の戦闘が終わるのを物陰から覗いて待っていたのだろう。

そんな簡単な事態を久しぶりの戦闘に夢中になって思い当たらなかった私の失策だった。

「さて。アタシが何を要求しているのか分かるだろう？」

「ええ」

この場合イニアス様は私にとって絶対の人質だ。私は殺されようと犯されようと逆らう訳にはいかない絶対の。

「私を自由にして構いません。だからイニアス様に傷をつけるのは許してください」

「ふーん？ よほどこの坊やが大事なんだね。だがそれが演技じゃないと言う保障はない。あんたがアタシに逆らわないと言う保証を見せな」

「私の命を望むと言うなら喜んで差し上げましょう。ですが、その前にイニアス様の身の保証をしてください」

「ふむ」

私の譲れない提案に彼女は少しだけ考え込む。

「あんた随分硬い性格してるみたいだね。なら、まずはあんたが誓いを立てな。あんたがアタシに逆らわないとあんたの誇りを持って誓いを立てたなら、この坊やを解放しようじゃないか」

「良いでしょう。私はセシリア・ディ・アルトレリアの名と誇りにおいて貴女に絶対の服従を誓います。無論この誓いはイニアス様の解放が条件ですが」

「良いだろう。この坊やは解放する。が、その前に・・・」

「？」

「あんたがこの坊やを説得しな。このままこの坊やを解放したらアタシに問答無用で殴り掛かってきそうだからね。解放は約束してや

るが攻撃をされれば反撃せざるを得ない。それはあんたも望む所ではないだろう？」

言われて初めて地面に這い蹲ったイニアス様が目に涙を溜めるほど悔しがって唇を噛んでいるのだと気付いた。確かこのままでは彼女の言うとおり解放された途端に彼女に攻撃を仕掛けてしまうだろう。それでは私の誓いは水の泡になる。

「イニアス様、ご自愛を。この場合は生き延びる事だけを考えるのです」

「で、でも！」

「生きてさえいればいつか勝機が訪れます。その為にも今は機を待つのです」

「でも、それじゃセシリアが！」

「私は大丈夫です」

自分で言っておいてなんだがまるで根拠がない。まあ、この場合嘘も方便だろう。

「さあ。イニアス様の解放を」

正直な話をすれば馬鹿正直に解放などしてくれる訳がないと思っていた。このままイニアス様を拘束したまま私を攻撃するなり援軍を待つなりすれば良いのだから。だからと言う訳ではないが――。

「ほいっと」

彼女がイニアス様をあっさり解放したのはちよつと驚いた。

「アタシの能力の特性上、今は西側の警備が手薄になっている。隠れながら西側へ進めば見つからずに包囲を抜けるのも難しくはないだろう」

しかも警備状況の穴まで教えてくれた。怪しいとは思うが疑っていてはきりが無い。私は私に伺う様な目を向けてきたイニアス様に頷いて見せるとイニアス様は意を決して歩き始め――。

「最後に特別サービスだ。アタシは『リバーズ』。中央都市の本部所属。その気があるならいつでも攻めてきな。相手になってやるよ」
彼女の言葉に一瞬だけ振り返って彼女を強烈な目で睨んでから背

中を向けて走り出した。

「どういづつもりですか？」

「何、あの坊やは見たところ世間知らずだ。そんな坊やがあんたみたいな保護者から離れて一人で生きられると思うかい？」

「・・・」

「それでも生きる可能性があるとしたら確固たる目的が存在する時だ。その目的に復讐って奴は大いに役に立つ筈さ」

「破格のサービスですね」

復讐という負の感情を糧に生きるのは賛成しないが確かに今のイニアス様には確固たる目標がなければ直ぐに生きる事を放棄してしまうだろう。その意味で彼女の判断は正しかったと言える。

「と。幾らノロマな連中でもそろそろ来るみたいだね」

約束を完璧に守られてしまった為、誓いを立てた私は彼女に逆らう訳にも行かず呆然と立っていると遠くから複数人の足音が聞こえてくる。どうやら私はここまでのようだ。後はイニアス様が無事に逃げ延びる事を祈って――。

「きゃっ！」

「ぼさぼさしてないでさっさと入るんだよ！急げ！」

「な、何を？」

祈っている最中に私は蹴飛ばされるように近くにあったゴミ収集の為の大きなダストボックスの中へと押し込められた。

混乱する私の元へ外の声が届いてくる。

「リバーズ。首尾はどうでした？」

「ガキの方は始末したが女の方には逃げられちゃった。追跡班を組織しな！相手は手負いだ。あんたらが幾ら無能でも追い込める筈さ！」

「・・・子供の方の死体はどうしました？」

「『^{リバーズ エア}反転滑走』を使ったんだが案外丈夫なガキだったから海の方に飛んで行っちゃった。間違はなく無事では済まないだろうが探すなら勝手にサルベージしな」

『了解しました』

何なの、この人？さつきから嘘ばかり。

私は女性の言動に呆れながらも感心して――。

「あ」

気を抜いた途端に補充無しで全力稼働させた身体に限界が来た。

どんどん身体から力が抜けて意識が沈んでいった。

「ったく。手間を掛けさせてくれる」

僅かに覚醒した意識にそんな声が飛び込んできた。僅かに目を開くと薄汚れた天井が見えボンヤリとした意識の中に赤い髪の女性が映る。

「ここ、何処ですか？」

「アタシが宿泊する為に取った宿さ。行き成り気絶したあんたを運び込んでやったんだ。感謝しな」

「は、はあ。ありがとうございま・・・す？」

何となく素直に感謝して良いのか分からなかったので語尾が変になっちゃった。

「それにしてもあんた吸血鬼なんだろう？この程度の傷パパッと治せないのかい？」

「もう十年以上も血を飲んでいませんから。その上で過剰な出力で戦いを強制してしまったので身体がオーバーヒートしてしまったんです」

「要するにガス欠かい」

呆れたような声が部屋の中を動き回り、再び私の隣にやってきた時には彼女の手にはナイフが握られていた。

「アタシで良いな？」

殺すのかと思ったら妙な質問をされた。

「何がですか？」

「アタシの血で良いのかって聞いているんだよ」

「血？」

ボンヤリとした頭にその単語が徐々に染み渡ってくる。ひよっとして私に自分の血を飲ませようとしているのだろうか？

「わ、私はこう見えても純正の吸血鬼です。だから、えっと、処女の生き血以外の血は受け入れる事が出来ないというか、力に返還出来なくて・・・」

「じゃあ問題無いじゃん」

私の支離滅裂な言葉にあっさり自分の手にナイフを走らせ血が滴り落ちる。落ちた血を勿体無いと思う私の口に血が――極上の美酒ですら及ばない最上級の処女の生き血が流れ込んでくる。

思わず、そう思わず手が動いて血の滴り落ちる手を引き寄せて傷口に舌を這わせて必死に血を舐め取る。

十数年血を断っていた私に与えられるのが私にとって嗜好といえる血だったのが災いしたのかもしれない。胃に落ちる以前に――喉を通っている最中に既に消化されて吸収されていく血に我慢が出来なくなった。

私の頭の中からイニアス様も自分で立てた誓約すらも吹き飛んで気付いたら私は猛烈な勢いでベッドから起き上がって彼女に抱きつき――。

「ちょ！？」

勢い良く彼女の首筋に自らの牙を突き立てていた！

溢れ出した血液を残さず口を含んで嚥下すると今まで喉の時点で消化されていた血がやっとなにに届き、先程に勝る勢いで消化、吸収されていくのが分かる。

『美味しい。駄目。止まらない。もっと』

可能な限りの力で目の前の彼女を抱きしめ血を嚙り上げる私の姿はきつと誰の目から見ても吸血鬼以外の何者でもなかっただろう。

「や、やめ・・・これ以上は・・・」

彼女の声は耳には入っていたが意味としては理解が走らなかった。私は文字通り徐々に飲む最高級の美酒に酔っていたのだ。

だからという訳ではないが――。

「う！」

突然最高級の美酒から不味くはないがラーメンの残り汁のような味に変わった血の味に思わず首筋から口を離し口の中にある血を吐き出していた。

「げほ！げほ！な、何が・・・」

驚いた私の腕の中でぐったりとして気を失っていた彼女——だった筈の人が青白い顔でユックリと床に倒れた。

「どういう事？」

確かに彼女だった筈なのに、いつの間にか男になっていた。

「はあ。なるほど」

様々な手を使って治療を施した彼女——だった彼が目を覚まし事情を聞いたところで私は呆れながら納得していた。

「変な能力ですね」

「吸血鬼に変わって言われたよ、おい」

まあ、今回に限っては私に一方的に非があるのも事実なので誠意看病する事にした。まあやる事と言っても増血剤を飲ませて点滴を打つだけなのだが。

「それにしても神剣があつて良かったですね。神剣が貴方の身体を活性化してくれなかったら今頃干からびていたと思いますから」

「人事みたいに言っな！」

「ごめんなさい」

とりあえず黙って看病する事にした。

全く持つて酷い目にあつた。

彼女——セシリアの話によれば俺は全体の3割近い血を彼女に飲まれたという事らしい。そのお陰でセシリアは本来の4割近い力を取り戻したらしいのだが逆に俺は生死の境を彷徨う羽目になった訳

である。

冗談抜きでミタマがいなかったら死んでいた可能性が高いらしい。
「行き成り誓約を破って俺を殺そうとしやがって」

「わざとじゃないですよ。貴方が不用意に血を与えるから普段は抑制している吸血衝動が一気に溢れてしまったんです」

「男になった途端吐き出したくせに」

「・・・」

沈黙しつつも視線を逸らすセシリア。どうやら本当に処女の生き血以外は嗜好として受け入れられないらしい。

「兎に角、お前は連れて帰るからな。今の内に準備して置けよ」

「はい」

「？」

何故か連れ帰る話をしたら神妙な顔で頷かれた。まあ、いつか。

日の光を浴びられないセシリアの為に夜間を限定して移動してやつと自宅であるマンションへと帰りつく事が出来た。

「ただいま」

「お帰りなさい」

一週間近く留守にしまったが眼鏡を通してリアルタイムで交信していたテンペストはいつも通りで、仕事に同行させたミタマはご機嫌で、そして――。

「・・・」

当然のように玉藻が機嫌を損ねていた。

「お、お邪魔します？」

そしてオズオズと俺の家に上がりこむセシリア。何を遠慮しているのやら。

「あの、ここは何処なのでしょう？私、研究所かどこかに送られる手筈だったのでは？」

「なんか皆同じ反応するな」

「それが普通じゃないかしら？」

とりあえず詳しい説明はテンペストに一任する事にした。

「はあ。横取りですか。それじゃ私は研究所とかに送られたりかは・・・」

「しません。まあ実際は貴女の重要度次第という事なのですが話を聞く限り本部が重要視していたのはお連れさんの方みたいなので多分大丈夫でしょう」

「まあ確かに私は吸血鬼としてはあまり高位な方ではありませんから。イニアス様と比べればありふれた、とまでは言いませんが並の吸血鬼です」

ある程度事情を把握したセシリアは自分の境遇は理解したらしいのだが――。

「それで私はここで何をすれば良いのでしょうか？」

「さあ？」

「さあつて、私は訳もなくここに連れてこられたのですか？」

「言ったでしょう。リバーは横取りするのが好きな人なのよ。貴女はそのリバーの嗜好にヒットしたから横取りされて連れてこられた。それだけなのよ」

「それだけつて」

「この子達も貴女と同じ事情で横取りされてきたのよ。で、今この子達がなにをしているのかというと・・・」

テンペストは2人――ミタマと玉藻に視線を向けると2人はちょっとだけ視線を逸らしながら――。

「基本的に一日中部屋の中でゴロゴロしていますね」

「私はたまに散歩に行ったりしてますけど」

自堕落な回答が帰ってきた。

「つまり。平たく言うの特にやる事はないという事でしょうか？」

「そ、そんなはつきり言わなくても」

涙目の――特に何もしていない玉藻がセシリアに訴える。

「でも、そういう事なら暫く寛がせて貰います。てっきり研究所送

りだと思っていたので気が抜けてしまっただけ」

本気でそっこの意味で緊張していたらしいセシリアはほろっと気を抜くとその場にペタリと座り込んでしまった。

考える時間が少なかった為、実を言うとセシリアに対しては完璧とは言いがたい策しか思いつかなかった。

ミタマや玉藻に対しては早々俺からは離れられないように策を講じたのに対しセシリアは連れてくるまでの策しか練れていない。つまりこれからどうするかはこれから考えようかと思っていたのだが――。

「起きていますか？」

そのセシリア本人が俺の部屋に深夜忍び込んできたのはセシリアが俺の家に着てから数日後の事だった。

「何か用か？」

「あゝ。えっと、その、実はお願いが……」

「こんな事を言うのは非常に恥ずかしいというか不躰というかお世話になってる手前、礼儀知らずだとは思いますがどうしても我慢出来なくて」

「夜這い？」

「ち、違います！」

下世話な事を考えた俺に対してセシリアは過剰な反応で否定する。どうでも良いがそんな大声出すと他の面子にばれるので忍んで来た意味がない。

「わ、私はただ血を分けていたただきたいと思って」

「血？」

「は、はい」

「何で？まだ何処か身体に不調でもあるのか？」

「いえ。そういう訳ではないのですが久々に飲んだ血が極上だった為か吸血衝動の抑制が緩くなってしまっています」

「要するに血が飲みたくて溜まらなくなったと？」

「は、はつきり言わないでください」

顔を真っ赤にして恥ずかしがるセシリア。良く分からないが吸血鬼側からすると恥ずかしい事なのかもしれない。

「別に良いけど今度は飲みすぎるなよ」

「わ、分かっています」

俺が女へと反転するとセシリアは一も二もなくアタシに飛び掛ってきた。どうやら今までのやり取り以前に相当我慢をしていたらしく、アタシの断りも無く以前と同じように首筋に牙を突きたててきた。

「く」

前にも思った事だが牙を突きたてられているというのに痛くないというかジンワリと何か暖かい物が広がっているような感触でとても気持ち良い。

そんなアタシの感想を他所にセシリアはゴクゴクと実に美味そうにアタシの血を嚥下していつている。最上級の美酒と表現していたが嘘は無いらしい。

それは兎も角――。

「セシリア。そろそろ・・・」

これ以上飲まれたらまた倒れてしまうので中断を迫ったがセシリアは最初の言葉など忘れたようにアタシの血を嚥下し続けている。駄目だ、聞いてない。

仕方が無いので最終手段。

「ぶ！」

それまで美味しそうにゴクゴク飲んでいたセシリアは唐突に血を噴出してゴホゴホと咳き込んで『俺』を睨みつけてきた。

「い、行き成り何を・・・」

「飲みすぎ」

「あ」

理性を無くして血を飲み続けるセシリアを止める為に嗜好の合わ

ない男の血を飲ませてやったのだ。

自分がまた歯止めを無くしてしまった事に気付いたセシリアはバツの悪い顔をするが俺はふとそれを好機に思った。

「まあ流石に毎日という訳には行かないが、定期的になら血を飲ませてやつても良いぞ」

「い、良いのですか？」

「飲み尽くされるのは困るが、今みたいに男に戻れば止められるのは分かったしな」

さっきまでの女の血がまだ残っているのか濃い酒を飲んだ後のようにほくっと思を吐いてペタンと床に座り込む。

それを見てどうやらセシリアを『確保』する事に成功したらしい事を確信した。

第四章

基本的に夜間しか活動の出来ないセシリアは昼間は寝ているのだが――。

「これって本当に必要か？」

俺は大工道具を駆使してセシリアから注文を受けた物をせっせと作りながら本人に尋ねてみた。

「勿論ですよ。何の拍子に日光が私の部屋に入ってきてしまうか分かりませんからね。そういうときの為に完全に光を遮断出来る物は必須といって良いでしょう」

何を隠そう、俺が作らされているのはセシリアの棺型のベッドなのだ。要するに棺桶だ。

「色々理屈捏ねてるけど本音は？」

「一度やってみたかったです」

「・・・」

そのセシリアの趣味の為に俺はこうしてわざわざ材料を買ってきた上でトンカチを使って作業させられている訳である。

しかも物が物である。

唯の棺桶を作れといわれただけなら苦勞は――するけど簡単なのが要求されているのはベッドに兼用出来る棺桶なのだ。外見は棺桶で中身はベッドという細かい注文に答える為に俺が試行錯誤を繰り返す羽目になった。

セシリアが我が家に居着いてから始めて知る事になったのだが、セシリアは俺の予想以上にお嬢様育ちだったらしい。

分家筋の妾の娘らしいのだが吸血鬼からすれば貴族も貴族。ガキの面倒を見たり戦闘経験豊富だったりしたから直ぐには分からなか

つたが彼女は彼女で世間知らずで——我侬だった。

「ここに本棚が欲しいですね。それとこっちは私専用の・・・」

勝手に一部屋占拠してしまったセシリアは自分専用の棺を要求した後も次々と自分が欲しい物を俺に要求してきた。

「それと、こっちは・・・」

「まだ要求する気かい」

「駄目ですか？」

しかも甘え上手。両手を前で組んで上目遣いで哀願してくるなど反則的な甘え方だ。

「へいへい」

俺の予算がかなりの額に上っている事もあり、結局セシリアの要求をかなえ続ける羽目になってしまった。

「随分あの吸血鬼に甘いんですね」

無論そんなセシリアを快く思わない者もいるのである。

「不服か？」

「はい。大いに」

玉藻だ。本当はテンペストも気に入らないとは思っているだろうが彼女は何気に引つ込み思案な所があるので玉藻ほど直接的に進言してはこない。大人な態度なのではなく小心者なのだ。

「なんだかあの女が特別扱いされているようで・・・大いに気に入りません」

「玉藻は今まで一人で生きてきたからな」

「どういう意味ですか？」

見当違いの俺の回答にキロリと睨みつけてくる九尾の狐。

「セシリアは今まで自分より幼くて自分より身分の高いガキの面倒を見てきた。周囲から身を隠さなくてはいけないのは玉藻と同じだがセシリアは常に『面倒を見る』と言う立場にあつたんだ。だから今、俺と言つ存在に『面倒を見て貰って』いる事に甘えて浮かれているのさ」

ガキの面倒を見る為に『世話役』にならざるを得なかったセシリアは仮の姿。今の彼女が本当の姿なのだろう。

「そういう立場にあったあの女が今その立場から解放されて幸せの絶頂にいるから私には我慢しろと言つのですか？」

「そうだと言つたら？」

「！」

肯定に近い返事をした俺を玉藻がビックリした顔で見上げる。まあ単純に否定の返事をして口論になるのが面倒だから言ってみたのだが――。

「本気で言っているのですか？ 貴方が勝手に私を横取りしてきたくせに、その私を・・・」

なんだか追い詰めてしまったみたいだ。

確かにセシリアは『世話役』と言つ立場に立たされ本来と違う役割を演じなくてはならない苦勞を負ってきたのだろうが玉藻だってそれに負けない苦勞を負ってきた筈だ。

あらゆる時代を経て世界を裏から牛耳ってきたと言われる白面金毛丸尾には二つの見解があった。

一つは政治的見解からの一致から推測される時代の権力者に取り入り歴史を動かしたと言つ一面。

そしてもう一つは――。

「愛している」

「え？」

項垂れて涙ぐんでいた玉藻が呆気に取られた顔で俺を見る。俺が何を言つたのか理解出来なかったというような顔で。

「リバーズ。今、なんと・・・」

「俺は玉藻を愛している、と言つたんだ」

「・・・」

玉藻は俺の顔を少しの間凝視してから顔を逸らし、でもまた俺の顔を見て俺が目を逸らしていない事を確認するとまた顔を逸らした。「そ、そんなありきたりの言葉で私の機嫌を取れるとも思ってい

るのですか？」

「思っているよ」

何故なら九尾に関するもう一つの一面とは九尾が歴史の権力者達に取り入ったのは単純に『愛される為』の行為だったというもの。

そして俺は後者の意見に全面的に賛成だ。

玉藻は愛に飢えている。愛される事を誰より望み、渴望し、飢餓していた。

その玉藻にとって『愛している』は絶対の言葉。何よりも彼女が欲しがる他の何を置いても求めざるを得ない彼女への最高の褒美になる。

「ずるい」

「知っている」

この場面でこの言葉を使う事のずるさを俺は知っている。知っている上で使っているのだから自覚は十分だ。

「ずるい。本当にずるいよ」

「それは今言わなくてはいけない言葉なのか？」

「・・・」

玉藻が今言わなくてはいけない言葉。言って良い言葉は――。

「もう一回言って」

「愛している」

「もう一回」

「愛している」

「もつと。もつと言って！」

求める言葉。己の存在意義とも言える言葉を要求する言葉。貪欲に愛される事を願った少女は貪欲に言葉を繰り返し、繰り返し言葉を求める。

それを拒まず幾度も繰り返す俺の『愛している』という言葉。

「あ、ああ」

玉藻が俺にしがみ付きフルフルと震えている。渴望していた言葉により満たされ、溢れる心。

「嘘でも良い。もっと、もっと言って。私だけを愛していると言つて！」

「嘘じゃないさ。お前だけを愛しているよ」

「~~~~~!!!」

多少嘘の混じった俺の言葉にも拘らず身を震わせて感極まる玉藻。『もつともつと』と貪欲に求める玉藻の要求に俺はいつまでも『愛している』と囁き続けた。

「嘔吐き」

当然といえば当然だが俺にはもう一人機嫌を取らなくてはいけない女がいる。

「機嫌を損ねるなら目を瞑っていれば良いのに何でわざわざ覗き見してるかな」

言うまでも無くテンペストという名の『女』だ。満たされている玉藻が子狐形態で俺の頭の上に乗っている状態にも拘わらず愚痴をこぼしてきたと言う事は相当機嫌が悪いらしい。

「ヤキモチか？」

「・・・」

「普段は年上ぶってるくせに、お前って本当に可愛い奴だよな」

「な!？」

テンペストという女は相棒としては非常に頼りになるが女としては異常なまでに脆い。多分俺がこの女を本気で壊そうと思ったら10秒掛からないだろう。というか一言で十分。『お前なんて要らない』と言えば良いのだ。それだけテンペストは壊れる。だから言う訳ではないが――。

「俺にはお前が必要だ」

「!」

その逆の言葉はテンペストにとって玉藻に言う『愛している』に匹敵する効力がある。

「く!」

女の急所を貫く言葉と言うのは何度言っても有効だ。悔しそうに表情を歪めるテンペストだが内心の何処かでは歡喜していること間違いない。例え嘘だとしても有効な言葉は『真実』である時どんな防壁も打ち破る威力を持つのだ。

「お前が居ないと駄目なんだ。お前には常に隣に居て欲しい。お前じゃないと駄目なんだ」

「・・・」

テンペストがどんな環境で育ってきたのかは知らないがテンペストと言う女は玉藻と同じで貪欲なまでに『誰かに必要とされたい』という願望を持っている。だからテンペストを本気で落とすなら『完璧』であつては駄目なのだ。テンペストには十分に働ける環境で『自分は役に立っている』という実感を与えなければ満足出来ない女なのだから。

だから俺みたいに不完全でちょっと頼りない男にこそテンペストは心を開いてくれる。

「相変わらずずるい人」

「知ってるって」

「自覚がある分、尚性質が悪いわ」

「嫌いか？」

「そういう質問を平気でしてくるのが『ずるい』って言っているのよ」

「嫌いなのか？」

ちよつと意地悪したかったので分かりきった質問を繰り返してやった。その質問にテンペストは少しの間沈黙して悔しがっていたが――。

「・・・大好き」

結局望みどおりの返事をくれた。

頭の上には上機嫌の玉藻が子狐形態で寝そべって9本ある尻尾で俺の首筋を撫でてくるのでくすぐりたい。

部屋のソファに身を預けた俺の右にはテンペストが腕に寄り添って上機嫌で何か作業をしている。何の作業かは知らないがきっと俺の為になる作業なのだろう。

そんな女2人を待たせながら俺は左手で腰に差していた神剣を引き抜いて迷う事無く反転させた。

「どうしたのですか？」

ちよつと困惑気味のミタマが俺の左腕を取りながら尋ねてきた。契約した後のミタマは人間形態ではなくても俺の傍に居るだけで不満は無いようなのだが――。

「今どんな感じだ？」

「えつと。なんだかモヤモヤします」

それは単純に彼女が『嫉妬』という感情を理解していないと言うだけの話だ。実際神剣状態の彼女からは『不満』という感情がダダ漏れの状態だった。

「お前って分かりやすいよな」

「そう、ですか？」

「ああ。凄く分かりやすいよ」

言いつつ肩を抱き寄せてやると、それだけでミタマはポワポワしたホンワカな幸せオーラを振りまき始める。分かりやすく言えばミタマは『自分に構ってくれない状況』と『自分だけ仲間外れな状況』が不満だったのだ。本人が理解しているかどうかは兎も角。

「『女なんてちよろいもんだぜ』的な状況ですね」

「本当にそんなに単純なら苦労しないんだけどな」

3人をそれぞれに寝かしつけた後（ミタマは神剣形態で腰の後ろに居るが）起き出して来たセシリアと夜の散歩と洒落込んだ。

「実際の話、俺も女になれるからちよつと位は分かるんだが・・・」
「？」

「女ってというのは『頭』だけで考えて付き合えるほど単純な生き物じゃないんだよ。女ってというのは『子宮』・・・言い換えれば本能で行動する時があるから全く先が読めない時があるし、訳の分からない理由で怒り出す」

「『本能』ですか」

セシリアは俺の言葉になにやら考えていたようだが直ぐに肩を竦めて首を振った。女本人には分かりにくい例えだったのかもしれない。

「それはそうと力の方はどのくらい回復したんだ？」

「はい？」

「あれだけ俺から血を持っていったんだからそれなりに回復していて良い筈だろ？」

「ああ。力だけと言うならほぼ全快と言っても良い状況ですよ。唯、そのお陰で吸血衝動の箍が外れかけているので、その欲求を満足させる為に血を頂いている訳です」

「ふん」

「やっぱり『本能』じゃん。と思ったが口には出さなかった。

「そう言えば俺ってお前に何度も噛まれてるけど吸血鬼になったりしないな」

「何の話ですか？」

「吸血鬼に噛まれた者は吸血鬼になるって言うのは割と有名な話じゃないのか？」

「現実的に考えて噛まれた者が全て吸血鬼化していたら世界はとっくの昔に吸血鬼だらけになってしまっているではありませんか」

セシリアに肩を竦ませて呆れられてしまった。

「確かに私達の血や唾液には吸血鬼の因子とも言っべき物が含まれていて、それに感染した者は吸血鬼と似たような存在へと変化する事もあるのですが・・・」

「が？」

「感染力は非常に弱いので滅多な事で感染する事などありません」

「滅多な事って、どのくらい？」

「そうですねえ」

セシリアは暫し考えて少しだけ含みを持って、しかしやはり苦笑を持って応える。

「生まれたての赤ん坊程度の抵抗力の弱い者にならひよつとしたら感染するかもしれない、と言ったレベルでしょうか？」

「それって殆ど可能性は0じゃないのか？」

「いいえ、そんな事はありませんよ。ちゃんと『ある条件』を満たせば感染する確率は格段に跳ね上がりますから」

「条件？」

「人間が最も抵抗力を失う状態にすれば良いのです」

「それって・・・」

俺はその『ある条件』に直ぐに思い当たった。

「ええ。死ねば良いのです」

「・・・」

「死んだ人間に対してなら3割程度の可能性で感染を実行させる事が可能です。もっとも死んだ人間である以上、脳組織が無事である可能性は恐ろしく低いでしょうし、それ以前に五体満足で死ぬ人間と言つのも稀ですから。例え吸血鬼化したとしても生きる屍・・・いえ、この場合動く屍と言ったところでしょうか？」

「それって何か役に立つのか？」

「さあ？」

今度こそセシリアは呆れた口調で肩を竦めて首を振る。

「私のように生まれながらに吸血鬼であつた物は『生きている』と言つて間違ひはありませんが二次的に吸血鬼になった者は『死んでいるのに動いている』という現象のようなものです。例えば血を吸いすぎて失血死してしまった時などによく起こる事故といつても良いような現象です」

「おいおい」

それって俺も危なかったって事じゃないか。

「一応本当に稀な例なのですが生まれたばかりの赤ん坊に感染した実例という物もあったそうです」

「そうなのか？」

「1歳の誕生日を迎える前に死にましたが」

「・・・」

「感染した吸血鬼の因子と成長して高まった体の抵抗力が闘ぎあつて反発しあい、結果両者共倒れになった、という話です。どうも私達の因子は生きている人間とは相性が悪いみたいです」

「二次的な吸血鬼なんて所詮作り話って事か」

「ん」

結論を出した俺に何故かセシリアは唸って首を傾げる。

「一応可能性はない訳ではないのですよ。ヴァンピールというものをご存知ですか？」

「吸血鬼と人間のハーフだったか？」

物語に出てくる吸血鬼ハンターなどはよくそう言った境遇を持っていたりする。吸血鬼を倒せるのは吸血鬼の力と人間の心を持ったヴァンピールだけだ、とか。

「実際ヴァンピールというものがどの程度吸血鬼の力を持っているのかは分かりませんが人間との混血である彼らなら私達の因子よりも少しは人間に適した因子を持っているかもしれない。そういう可能性の話です」

「作り話にするにしても少しは可能性のある話って事か」

「私は見た事がありませんけどね。吸血鬼化した人間もヴァンピールも」

「夢があるんだかないんだか」

死んでも生き返るなんていうのはやはり都合の良い幻想なのだろう。

第五章

知ってはいた事だが異変という物は前触れもなく起こる物だ。

異変はセシリアが俺の元へ着てから約一ヶ月後。深夜と呼べるような時間帯に言うまでもなく不意に起こった。

「・・・」

深夜と言う時間帯の為、勿論眠りについていた俺は遠くで聞こえた爆発音で目を覚ました。何事かと起き出して窓の外を覗き込んだ俺は遠くで立ち上る炎と煙を一瞥して——なんとなく胸騒ぎを覚えた。

「テンペスト、状況は？」

「確認するわ。被害現場は・・・え？」

同じく起き出してきた他の面子の中で相棒であるテンペストに尋ねると答えの前に表情に驚愕を作る。

「どうした？」

「場所は・・・本部施設よ」

「・・・」

「被害状況は全ては把握出来ないけれど外から見た限りではほぼ壊滅状態。普段眼鏡とリンクさせている情報端末も連絡が付かなくなっているわ」

「・・・行ってみるか」

何が起こったのか分からないが、ここに居ても何も分からないという事が分かったただけだ。

意外な事だが本部までの送迎はテンペストが車を出してくれた。いや意外なのは車を出してくれた事ではなくテンペストが免許を持っていた事が事の外意外だった。

「悪かったわね」

本人に言ったら機嫌を損ねてしまったが。

ともあれ俺達はスムーズに本部——の残骸にまで辿り着く事には成功してモクモクと煙が吹き上がり現在も尚消化中の建物を遠巻きに野次馬に混じりながら眺めると言う間抜けな事をしていた。

「なあ。本部施設って確か・・・」

「ええ。かなり重装甲でシエルター代わりにもなるって聞いていた筈だけ」

「それがこうも容易く撃破された。これをやったの、何だと思う？」

「・・・化け物かしら？」

「同感だな」

俺は大きく頷いて一同を見渡す。

「さて。考えられる可能性は？」

「とりあえず可能性としては3つほどかしら？」

「1つ目は？」

「以前本部に進入してきたゴースト一派、つまり天然の能力者達の仕業」

「あいつら本部・・・と言うより俺を目の仇にしていたからな。確かにありえないとはい切り切れないな」

「2つ目は人外の仕業」

「本部は人外を人体実験とかしていたから相当恨まれていた筈だしな。可能性としては上々か」

「最後に本部の抱えていた能力者達の反乱」

「まあ、それも一応可能性の一つか」

とりあえず考えられる可能性を提示して吟味を開始する。

「この中で一番可能性が低い物は？」

「3番、能力者の反乱だろうな」

「根拠は？」

「本部はお抱えの能力者達に常に鎖を付けていた。鎖を付けた能力者が本部に対してここまで大きな反乱を起こせたとは思えない」

本部が能力者達につけた鎖の種類は様々だ。一番分かりやすいものを言えば腕輪が上げられるが勿論、俺やテンペストにだって鎖は付けられている。

俺に対してはミタマや玉藻、セシリアなどといった人外の保有の黙認行為。そうする事で俺は本部の器の大きさを測らせられる事になり迂闊に逆らう意思を相殺されてきた。

テンペストに対しては眼鏡を通して俺に反則的に有利な情報を与える代わりに同じく眼鏡を通して俺の情報を本部に対して筒抜けになるように細工がされていた。俺を裏切らないテンペストに対してならば、これは絶好の鎖と言って良いだろう。本部を裏切ると言う行為はそのまま俺へと裏切りへと変わるのだから。

ここまで能力者に対して用心深い本部が早々遅れを取るとは思えない。だから『能力者の反乱』は一番に選択肢から削除される。

「次にゴーストのような天然能力者の襲撃の可能性だが・・・」

「彼らにしては少し目立ちすぎるわね」

「だな」

夜中とはいえ、これほどの被害を出してしまつては隠密どころの騒ぎではない。この被害は町中どころか世界中に知れ渡つてもおかしくないほどに派手過ぎた。

「となると残る可能性は・・・」

「本部に恨みを持った人外の襲撃」

まだ過程の段階ではあるが俺達がある程度結論を出したところで、それに応えた訳ではないだろうが野次馬の中から悲鳴が響き渡る。

「何だ？」

俺は思わずテンペストに情報を求めたが、直ぐにそれが無駄な事だと分かった。何故ならそれはテンペストに聞くまでもなく直ぐに姿を現したから。

悲鳴を上げた人間——ではなく悲鳴を上げさせた原因を作った方の人間。それが地面を離れてゆらゆらと漂っている。

決して宙に浮かんでいる訳ではない。あれは——。

「何だ、あの管は？」

管——触手のような物に捕らえられて持ち上げられていた。

「あの人、血が！」

「血？」

「血が・・・いえ、体中の体液を抜き取られていつている」

暗がりの遠巻きなので確認が遅れたが確かにテンペストの言うとおり捕らえられた人間は体中の水分を吸い上げられ急速的に干からびていった。先程の悲鳴を上げた主はそれに気付いたからこそ声を張り上げたのだろう。

完全に干からびて絞りカスのようになった人間は放り出され、地面に叩きつけられると同時に四肢が粉々になって地面に散らばる。干からびていた事も原因だろうが叩きつけられた勢いが余りにも容赦がなかった為だ。

俺は勿論、その人間に対して面識もなければ同情もしなかったのだが次の瞬間人事の事態ではなくなっていた。

「げ！」

見れば件の管が無数に俺達を取り囲むように出現していた。

今まで傍観していた野次馬のあちこちから悲鳴が響き渡る。他人事なら無関心で居られるが自分事なら我が身が大事だ！

俺達もそれに倣い次々捕らえられる人々に見向きもせずに車へと走りより（乗ってきたのとは別にそこらにおいてあった車を）テンペスト運転で急発進して現場を離れる。

その俺達の後を——。

「うげ！」

体中から無数の管を生やした巨大な『何か』が追いかけてきた。

「なんだ、ありゃ！？」

「強いて言うなら大きな毛虫？」

「確かに見えない事もないけど・・・」

遠めに見れば確かにそれは巨大な毛虫だ。その毛の一本一本が人間を捕食して体液を吸い尽くす管だったとしても遠めに見れば確か

に毛虫に見えたのだ。追ってくる時に無数の足を生やして百足のように走ってくるまでは。

「うげえ」

流石に気持ち悪い。というかあんなのに追いかけられるのかよ。

「テンペスト！もつとスピードを！」

「分かっているわ！」

テンペストも俺と同じ生理的嫌悪を感じたのだろう。勢い良くアクセルを踏み込み車が加速していく。だが――。

「しっかり付いてくるし」

あの走法でどんな走り方をしているのか猛スピードで走る車についてくるどころか――。

「追い上げられてる」

「この車じゃこれ以上スピードは出ないわ！」

こうなればもう『逃げ切る』という選択肢を諦めるほかない。

「テンペスト。方角を東に向ける」

「無茶を！・・・やってみる」

一瞬抗議しかけて直ぐに俺に意図を汲んでくれたのか大人しく従ってくれる。流石に俺の相棒だ。

横転しそうな勢いでカーブを曲がり、何とか思惑通りの方角を確保したのを確認してから俺は車の天井を『リバースエッチ反転凶刃』で決り切ってサンルーフ代わりにして体を出す。かなり風の圧力が掛かるがこの際文句言っている立場ではない。

「でかい分だけのがでかくて助かる」

そして手に握っていた10円玉をそつと指から離す。

10円玉――『リバースエア反転滑走』は勢い良く化け物に迫り、そして何事もなく通り過ぎた。

「どうなったの！？」

「一応貫通はしたらしいが・・・それだけだった」

「どういう事？」

「的がでかすぎた。どうやら部分的に攻撃しても無駄な体をしてい

るらしい。一部をふっ飛ばしても足止めにもなりやしない」

「どうするの!？」

「・・・考え中だ」

兎に角、相手の正体だけでも分からないと対策の立てようがない。そもそもどうして俺達を執拗に追ってきているのかすら分かっていないのだから。

「この波動、この息遣い。でも、まさか」

その時『答え』に一番早く辿り着いたのは隣でずっと沈黙を保っていたセシリアだった。

「ありえない。けど他に考えられない」

「どういう事だ? 何か分かったのか？」

「アレは・・・イニアス様です」

「何？」

「イニアス様。私の・・・いえ私達吸血鬼の最後の希望として誕生した吸血鬼王家最後の生き残り」

「あの時のガキ? あれがか!？」

「確かに容姿は変わり果てていますが波動にかすかにイニアス様の波長が感じられます。それに・・・」

「それに？」

「私達を執拗に追跡しているのは『貴方を』追っているからです」

「・・・そういう事か」

あの時、確かに俺は自分を本部所属のリバースだと名乗った。だから奴は本部を壊滅させた上に執拗に俺を追ってきているのだろう。「参ったな、こりゃ。まさかたったの一ヶ月でここまで変貌してくるとは」

「いいえ。あれは・・・あれはもはやイニアス様の残滓でしかない。もう元には戻れないし理性も欠片ほどには残っていないでしょう」

その普段のセシリアからかけ離れた冷たい声に思わずギョツとして彼女を見ると声とは裏腹に悲しそうな瞳で追ってくる化け物を見つめる彼女が居た。

「イニアス様。どうしてそんな愚かな選択をしてしまったのですか？そんなにリバー스가憎かったのですか？そんなに私と引き離されたのが辛かったのですか？」

「・・・」

理解する。セシリアは冷徹になった訳ではない。哀れんでいる訳でもない。ただ彼女もどうすれば良いのか分からないのだ。感情の置き所を失い、俺を恨む事も出来ず自分を責める事も出来ず、ただどうすれば良いのか分からず俺に縋る目を向けてくるだけだった。

「任せておけ」

だから迷わずそう言った。

何とかする手段を確立出来た訳ではない。けど、今セシリアの心の支えが無ければ彼女が何処かへ行ってしまうそうで必死に繋ぎ止める為に自信を持って力強く頷いてやる事しか出来なかった。

「とりあえず現状を確認するぞ。あいつは一体何をしたらあんな風になれる？」

「血を、血を大量に摂取し続けたのだと思います。本来はイニアス様も私と同じ純正の吸血鬼ですから嗜好にあった血以外は受け入れる事が出来ないのですが・・・」

「際限なく血を飲みまくった結果あんなったと？」

「分かりやすく言うなら拒絶反応で暴走して、暴走が更に嗜好に合わない血を取り入れ、更に暴走すると言う悪循環が生まれてしまったのでしよう。嗜好に合わなくても血を力に換えるのが吸血鬼。今のイニアス様はまさに力の塊です」

原型を失っていると言う事は許容量を軽くオーバーしてしまっていると言う事。例えて言うならば人間が25メートルプールの水を全て飲み干すような物だ。胃袋どころか体の質量よりも多い容量を無理矢理取り入れるならば人間の『形』を保っていられる訳がない。「理性もないのに正確に俺を追ってきている理由は？」

「理性は無くとも本能のレベルで貴方を敵と認識しているのでしょ

う」

「生きる為の手助けが完全に裏目に出たか」

「いえ。恐らく私と離れた時点で遅かれ早かれ同じ結果になっていたでしょう。イニアス様は吸血鬼としては・・・幼すぎた」

納得する。セシリアという存在はあのガキにとって保護者であるのと同時に枷だったのだ。その枷であるセシリアと引き離された事であのガキは無知を振りかざして際限なく血を飲みまくった。結果、暴走の悪循環に陥り——あの様だ。

「それで、ああなった奴に前例は無いのか？何か対策は？」

「暴走して理性を失った吸血鬼に未来はありません。日の光から身を隠す術すら忘れてしまっているのですから」

「つまり夜明けになれば勝手に自滅してくれる訳か」

日が昇るまで粘る事が出来れば俺達の勝ちは自動的に決まると言うのはありがたい条件なのだが——。

「無茶を言わないで！」

当然の如くテンペストから抗議がくる。今だってフルスロットで徐々に追い詰められていると言うのに朝まで持たせると言うのは無茶が過ぎる。

都合よく東に向かって逃げている物の朝になるまでまだ数時間は掛かるのだから。

「兎に角、迎撃に適した場所まで移動を・・・」

言葉の途中、車に嫌な振動が走ったかと思うと後部座席に座っていた俺は運転席に座っていたテンペストと物理的に引き離される事になった。

「は？」

前輪と後輪。運転席と後部座席。その境目を背後から追ってきた化け物がいつの間にか伸ばしていた管に切断されて。

「ちょ！？待て——！！！」

勿論二つに分かれたからと言って猛スピードで走っていた車が大入しく止まってくれる訳がない！俺達は無茶苦茶に振り回されなが

ら必死にシートにしがみ付き、ガードレールに衝突すると言つ事で何とか停止してくれたのだが――。

「痛うゝ。無事か？」

「え、ええ。何とか」

後部座席に座っていた俺とセシリアは何とか這い出す物の当然の如く目の前には巨大な化け物の姿。

テンペストの位置を確認すると向こうもふらふらしてはいたが何とか運転席から這い出し助手席に乗っていた玉藻と一緒にこちらへ駆け寄ってきて――。

「リバース！？」

「あ？」

セシリアの声に振り返ると同時に俺の横を何かが通り過ぎていった。

「何だ？なに・・・が？」

訳も分からず俺の体がグラリと傾く。傾いて――ズシヤリと地面に『落ちる』。

「！」

慌てて立ち上がろうとして驚愕した。

左腕が――ない。

いや、それどころか俺は下半身が殆どなくなっていた。

「リバース！そんな・・・」

近寄ってくるテンペストや玉藻などの悲壮な声に僅かに振り返れば、何処かで見覚えのあるものが彼女らの傍らに立っていた。

俺の左腕から下半身までが。

「・・・」

そういう事か。

さつき通り過ぎた物。あれは化け物の管で、俺の左肩から入って右腰まで切断していったのだ。

「が！がは！」

自覚した途端、痛みがじわじわと湧き上がってくる。

「くそ！」

油断した。いや正確に言うならば現実感の欠如から非日常の空気を自覚する時間を奪い取られていた。俺は愚かにもこんな化け物を前にして『逃げ切る』とか『何とかする』なんて曖昧な手段を本気で取ろうと模索していたのだから！

平和ボケにも程がある！

俺はもうどうしようもないくらいに手遅れになった状況に追い込まれた初めて思考を切り替える。兎に角反撃だ。俺は何とか動く右腕だけで這いずり回り手を伸ばして下半身のポケットに仕舞われた10円玉を大量に握り締め――。

「リバース！？」

「ぐは！」

次に飛来した無数の管に体中と刺し貫かれ、文字通り吊り上げられて化け物に目の前まで運ばれていく。

「・・・」

こりやもうダメだわ。

目の前につれて来られても何処か顔で目なのかも分からない化け物を前にして俺は観念せざるを得なかった。恨み言の一つも言われるどころか俺は突き刺さった管から血や、その他諸々の体液を搾取されて今にも死にかけていた。

全てを吸い尽くされる前に何とかしなければ本当に終わり。

「ちくしょう」

だから、仕方ないので使う事にした。

鏡界天主

「あ」

目の前で爆発――否、衝撃の嵐が巻き起こり私は事の顛末を知る事になる。

リバースが『^{リバース エア}反転滑走』を使う時に摩擦係数をゼロにしていたの

は周囲、主に自分や私達に被害が出ないようにする為だ。

その摩擦係数をゼロにしないまま『^{リバースエア}反転滑走』を使用した為、大衝撃派が巻き起こり爆発に近い現象を引き起こしたのだろう。

「そんな」

だから、それは爆心地に居たりバースの安全を考慮されない反転技だ。リバースは絶体絶命の窮地において自らの命を欠けて自爆と決意し――。

「う・・・そ」

そのリバースの働きをあざ笑うように化け物が粉塵の中から生還する。

「あ。ああ・・・」

私は絶望に膝を付く。

「こんな・・・」

その私の隣から化け物に向けて声が張り上げられる。

「こんな事が貴方の望みだったのですか！イニアス様。こんな・・・こんな事をして何も帰ってくる物などないのに！」

セシリア。私の隣に居た吸血鬼の少女は聞こえていないと分かりつつも糾弾をし続ける。恐らく私と同じでそうでもないと自我を保ってられないのだろう。

私は現実逃避の思考迷路へ。

セシリアは加害者への糾弾を。

玉藻はぺたりと座り込んで呆然と化け物を見上げている。

ミタマは背後でボンヤリと何かを見つめていた。

「・・・」

あれ？

ちよつと待ってみよう。

今、何かおかしい物が私の目に映らなかっただろうか？今、この場にある筈の無い物が視界を通り過ぎて危うく見過ごしてしまうところだった。

何がおかしいのか？

私はもう一度じっくりと能力まで使って違和感を覚えた光景を見渡す。別に、これと言っておかしい物は見当たらないが——何かおかしい。

何がおかしいのかと言うと——。

「ミタマ？」

そうだ。彼女がおかしい！

ミタマの本性は千年前に作られた神剣の化身。彼女の今の姿はリバースが彼女に能力を使って初めて体現出来るもので、リバースが最後に彼女に触れてから既にリバースの限界時間の1分を超えてしまっている。

なのに彼女は未だに人間形態で、そしてぼんやりと『何か』を見つめていた。

な・に・を？

そもそもおかしい事は他にもあった。リバースが自爆を決意して既に1分強。何故、化け物が目の前に居る私達を捕食の対象にできなかったのか？

その回答。ミタマの見つめる先に居る『彼』を視界に収める前に再度、目の前の化け物から爆発が——衝撃の嵐が巻き起こる。

「なんだ。やってみれば意外と上手くいくじゃない」

その声が私の体を衝撃となつて貫き、振り返った私の視界に彼女となった『彼』の姿が浮かび上がる！

「ボヤボヤするな、テンペスト。一気に片付けるよ！」

「え。ええ！」

訳が分からなかった。でも訳なんてどうでも良かった。

だってどんな理不尽な事だって彼が——リバースが戻ってきてくれたなら何とかしてくれる筈だから！

「さして」

アタシは10円玉をもう一枚ポケットから取り出して化け物に向けて狙いを定め、そつと指から離す。

高速で飛んでいく『それ』は今までの『リバースエア反転滑走』となんら変わらない。違いは命中の瞬間――。

「新技『リバースストーム反転暴風』。しつかり味わいな！」

化け物の体の中から途轍もない衝撃を撒き散らし、文字通り暴風となつて破壊を撒き散らす！

今までは『リバースエア反転滑走』の速さ故にタイミングを取る事が困難だと思っていたがやってみれば直ぐにコツが掴めてしまった。命中の間、ゼロにしていた摩擦係数を解除して敵の内部に直接破壊を撒き散らすなんて事が今のアタシには容易く出来る。

しかし――。

「しづといね、本当」

件の化け物は『リバースストーム反転暴風』を食らいながらもアタシに向けて管を伸ばしてきた。ダメージがない訳ではないだろうがダメージを化け物自身が自覚していないのであれば意味はない。

「なら。本当の『とっておき』をお見舞いしてあげようかね」

迫る管を無視してアタシはスカートのポケットに収納されていたありつたけの10円玉を両手に持てるだけ掴み取りニヤリと笑った。

「さあ。冥土の土産にしな！『リバースインフェルノ反転煉獄』！！！」

両手に持った10円玉全てが超高速を持って化け物に突き刺さり――凄まじい衝撃を内部から連続で怒涛に際限無く容赦無しに化け物を侵食して――文字通り化け物の内部に煉獄を体現した。

「大勝ゝ利々」

アタシの笑顔のVサインに答える者は――。

「ぶー」

強烈な握り拳と――。

「が！」

強烈な蹴りと――。

「げぺ！」

強烈な羽交い絞めだった。

「ちよ、ちよつと待ってください。く、苦しい。苦しいです！死ぬ、死ぬ、死ぬ――！」

「五月蠅い！」

テンペスト――泣きながらアタシを凄まじい力で締め上げるセシリアに便乗する形でグーでドカドカ殴り続ける彼女は本当に涙目で心配させたのは分かっていたがバツが悪かった。

「と、兎に角、勘弁して。大技を使った後でもう倒れそうに体がだるいんだから」

「説明が先！」

「あゝ。はいはい」

あの絶体絶命な状況でアタシがどうやって助かったのか。体の半身を断たれ、衝撃の爆心地に居たアタシがどうやって『無傷』で生還する事が出来たのか？

「やぶれかぶれで『リバーストーム反転暴風』を使った後も一応はまだ生きていたんだよ。体から管は排除出来たから体液を吸収されて干からびるのは何とかなつたけど瀕死も瀕死。おまけにどこをどう絞りとつても使える反転技は後1回が限度。その1回の反転技でその状況を何とかしようと必死に頭を絞った訳」

「どうやって？」

「考えてみ。半身を断たれて、死ぬ一歩手前のアタシが何をどうやったらその状況をひっくり返せるか」

「そんな事言われても・・・」

「そうだな。アタシも思いつかなかった」

「え？」

「当たり前だろ。そんな絶望的な状況にいるアタシを一発逆転で何とか出来るなんて反則技なんて、ある訳がない」

「そ、それはそうでしょうけど、でも実際に・・・あ！」

やっとテンペストはアタシの言いたい事を飲み込めたようだ。

「そう。そういう事なの？」

「そぞ。そういう事」

言葉は足らずとも分かり合うアタシとテンペスト。

『あゝ』

無論、理解出来ていない玉藻とセシリアは不満を訴えてきたが。

「まあ、要するに何を反転させれば『反則技』が成立するのか、だ」
「？」

「あの時アタシを取り巻く状況は、どう控えめに見ても『何をどうやってもどうにもならない』と言う事に集約された」

「そうですね。あの状況から一体どうやって生き延びたのかすら私には・・・」

「だったら話は簡単じゃない！その『どうにもならない状況』って奴を使わせて貰えば良い」

「そ、それって・・・」

「漫画じゃないんだからこんな絶望的な状況で都合良く『何とか出来るような能力』がアタシに目覚める訳がない。その事実を反転させた」

「は、反則じゃないですか！」

「そうだよ？」

「・・・」

そう。本当にこれは反則以外の何者でもない。だが、その反則で目覚めた能力がある。

「『リバーエンプヘラー転生皇帝』。これがあの土壇場で手に入れたアタシの新しい能力だ」

「転生？」

「そう。アタシはあの状況で確かに死んだんだ。そして生き返った訳でもない」

そう。アタシが人間である限り死んだ者は生き返らない。それは

この世に存在する絶対的な摂理。だからアタシは生き返った訳ではなく――。

「アタシはあの瞬間、生まれ変わった。前のアタシは死に、アタシはアタシという全てを引き継ぐと言う理想の形をもって生まれ変わったんだ」

だから傷は残っていなかったし10円玉も大量に持っていた。

エピソード

『リバーエンプティ
転生皇帝』。

それは俺の新しい反転技ではなく新しく目覚めた能力。

俺が死ぬ時に発動し、理想的な状況の自分として生まれ変わる能力。

これだけ説明をするとなんだか物凄く便利で無敵な能力に思えるが、実はそれほど便利な能力と言う訳ではない。

『リバーエンプティ
転生皇帝』には強大な条件とリスクと制約が付きまとう。

条件とは即ち、この能力は俺が『死なないと発動しない』と言う事。強力な能力ではあるものの、この能力は俺が死ななければ何の役にも立たなくて、そして当たり前だが俺はそうそう死ぬつもりはない。

リスクとは即ち、理想的な状況の自分として生まれ変わる為には死ぬ直前にその『理想的な状況の自分』を思い浮かべられなければいけない。言い換えるなら死ぬ直前まで意識を保っていらなければならない、そのまま死ぬだけだ。死ぬほどのダメージを受けても意識を失う事を許されない。

制約とは即ち、この能力は無制限ではないと言う事。死ねば何度でも生まれ変われるという訳ではない。この能力を一度使う為には一つストックを消費する。このストックと言うのがまた面倒なのだ。ストックとはつまり俺が生まれ変わる為のエネルギー、言い換えれば生命のような物だと考えれば良い。それを俺の中にストックする為には文字通り生命が必要になる。無論、生まれ変われるのなら俺の生命一つくらいなら安い物なのだが、そこはそれ。俺の性格が原因なのかここで使われる生命と言うのは俺以外の生命——即ち、他人から『横取り』した物に限られる。

俺が直接手を下すのでも他人が手を下すのでも構わないのだが、俺が見ている前で5人の人間が死を目撃する事。それによって生ま

れ変わる為のエネルギーが一つストックされる。

何故人間である必要があるのかと言うと、俺自身が人間である為、人間の生命を横取りする必要がある——らしい。

人間の権限を無視するのであれば、これなら何人も殺してストックを山のように作れば良いと思われがちだが、残念ながら俺の中に蓄積出来るストックはどう大目に見積もっても二つまでが限界。

平たく言うとストックを全快にしたとしても俺が3回連続で殺されれば、やっぱり死んでしまう訳だ。

今までの俺の能力『リバーエネペラー反転支配』に比べれば恐ろしく融通が利かなくて使い勝手の悪い能力と言わざるを得ない。

「でも、そのお陰で助かったんだから文句を言う筋合いでもないと思うわ」

「別に文句を言うつもりはないけどさ・・・」

「それに今までの能力が使えなくなったわけでもないのでしょうか？」

「まあ、それはそうだけど」

あの後、新しい車を調達（強奪？）して自宅に戻った後詳しい事を話し合って一息ついていた。

「それより気になっていたんだけどミタマはどうなっているの？」

「ミタマ？」

言われてみると彼女は人間形態でニコニコしながら俺に寄り添っている。

「別に普段通りじゃないか？」

「態度はそうだけど、彼女、貴方と一分以上離れても人間のままだったわよ」

「そうなの？」

俺は直接ミタマに尋ねると、彼女は心無しか胸を張って自慢げに話始めた。

「今までは私と主様は『仮契約』と言った薄い繋がりが持っていなかったのですが主様が今回開眼したのは似非能力の助けがあったとはいえ紛れも無く自力が開眼した能力。即ち主様は天然の能力者へと格上げされたのです！」

「・・・へえ」

だから、何？と思った俺にミタマは不満顔で詰め寄ってくる。

「だから！私は元々天然の能力者限定で契約を成立させる神剣だったけど、今までの主様は天然の能力者じゃなかったかから仮契約しか結べていなかったの。それが今回主様が天然の能力者に格上げされた為に正規の契約が結ばれて、私との繋がりが強固な物になったんです。だから私限定ですが『接触しなくては発動しなかった能力』が離れていても有効になったのだと思います」

「・・・へえ」

「む。凄い事なのに何でそんなに『どうでも良い』リアクションなのですか？」

「だって、ミタマ俺にくっついてるじゃん」

「・・・」

自分で『離れても大丈夫』と言っているくせに結局ミタマは俺にくっついて離れない。これだと便利になった意味が特にない。だから俺の感動も事の外薄かった訳だ。

「それより本部の方はどうなったんだ？見た目、壊滅状態だったけど」

「ん」。相変わらず音信普通のままね。あれだけ規模の大きい組織だから全滅とか壊滅とか言う事態にはなっていないと思うけど・・・

「まあ、どっちでも良いさ。無事なら後で連絡してくるだろうし壊滅なら次の足場を探せば良いだけだ」

「相変わらず気楽ねえ」

「別に本部に肩入れしている訳じゃないしな」

俺は兎に角『樂が出来れば』それで良い。

「さて。次は何をするか考えると思いますかね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9741i/>

反転・遊戯 - リバース・ゲーム - 3（仮）

2010年10月8日14時34分発行